

# 江戸名所圖會

十四

					和 書 門
				八	
			一	六	
			二	三	
二	一	一	六	三	
冊	架	函	號	類	

庫 文 閣 内			和 書
七	八		
四	七		
函	二	〇	
八	〇		
架	冊	號	類

内 閣 文 庫	
番 號	和 8870
冊 數	20 ( 14 )
函 號	174 36



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

江戸名所圖會卷之九

玉衡之部 日録

湯島聖堂

終園三社

妻戀心神社

根生院

湯島辨財天

東叡山寛永寺

谷中瑞林寺

螢澤

七面大明神社

淨光寺

圓満寺

湯島天満宮

三橋

東叡山寛永寺

谷中瑞林寺

螢澤

七面大明神社

青雲寺

養福寺

道灌山

神田明神社

靈雲寺

湯島神社

池の端錦袋圓店

不忍池

同祭禮の圖

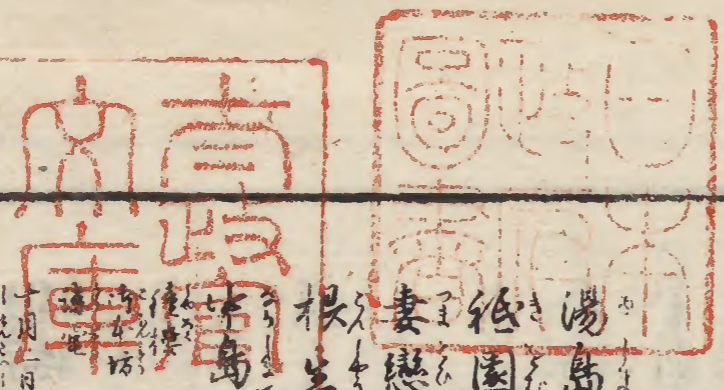
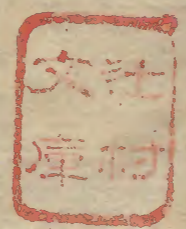
大元堂

藤洋院

藤洋院

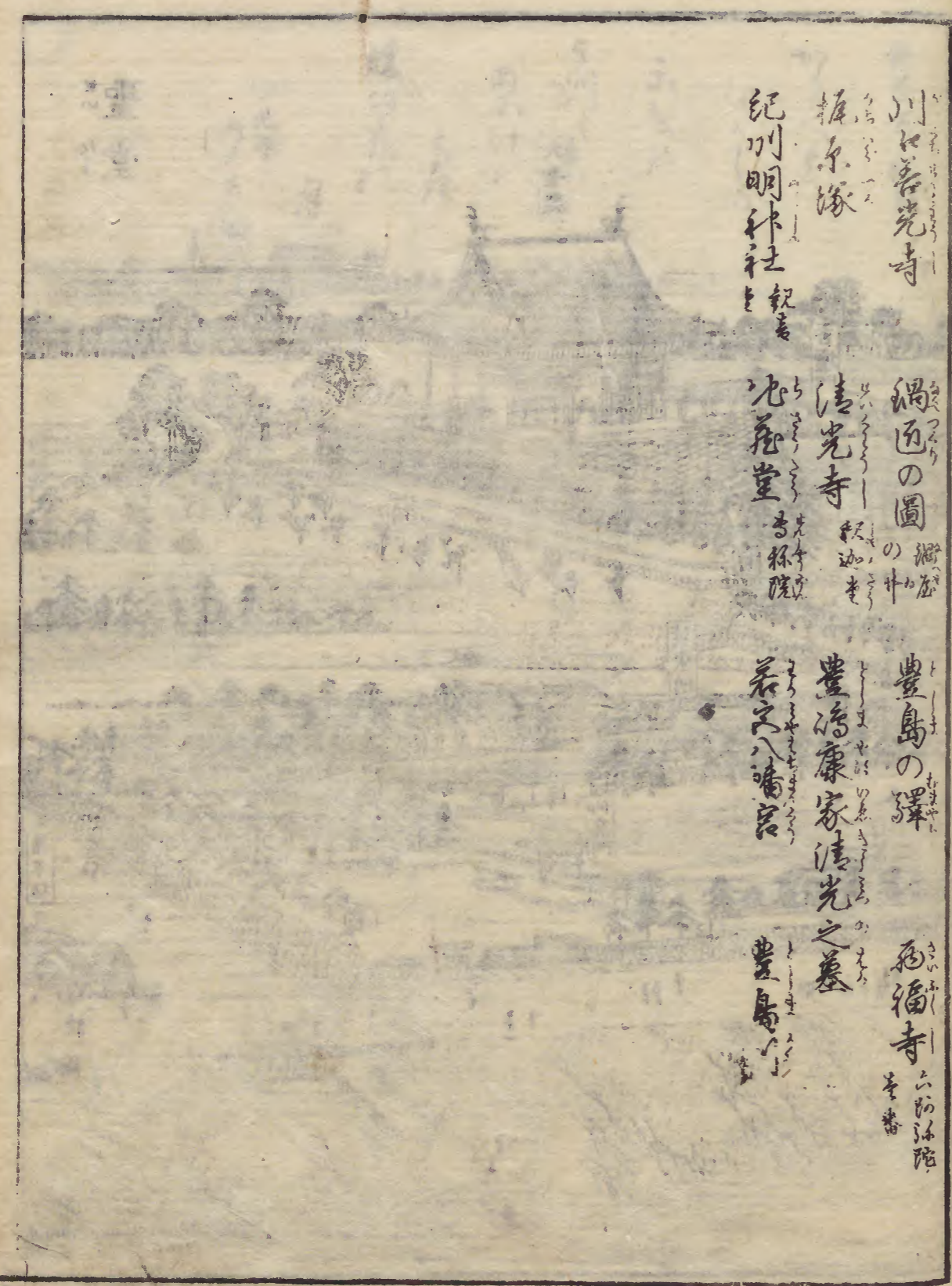
藤洋院

藤洋院

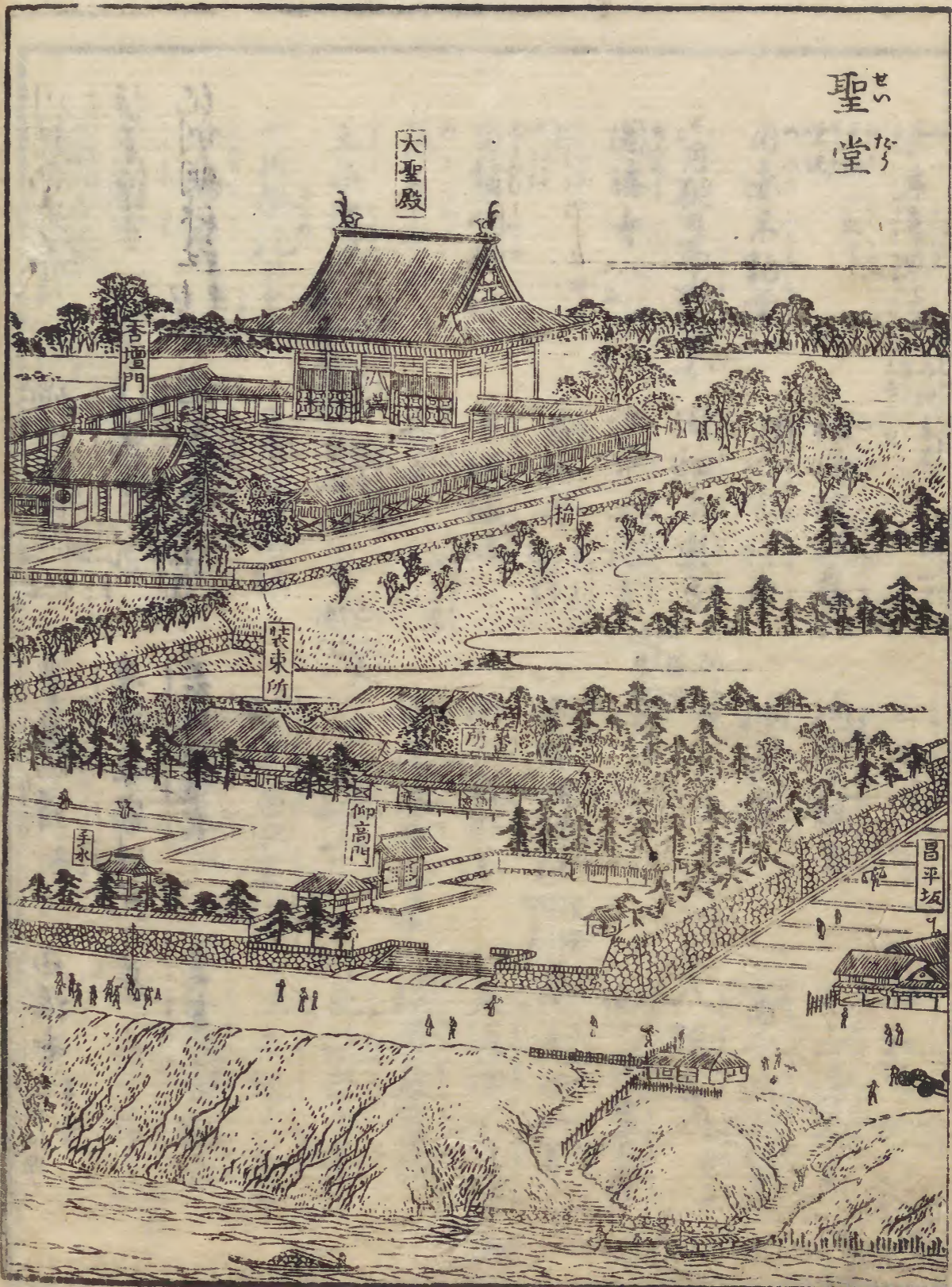


根津権現社 根津権現社  
 根津権現舊地 根津権現舊地  
 田畑子樂寺 田畑子樂寺  
 深井寺 深井寺  
 昌林寺 昌林寺  
 平塚城跡 平塚城跡  
 音谷川 音谷川  
 王子権現社 王子権現社  
 七月祭礼の巻 七月祭礼の巻  
 金輪寺 金輪寺  
 全別寺 全別寺  
 三法法印 三法法印  
 駒込大観音 駒込大観音  
 神明宮 神明宮  
 妙林寺 妙林寺  
 九山淨心寺 九山淨心寺  
 富士法圓宮 富士法圓宮  
 八幡宮 八幡宮  
 西谷寺 西谷寺  
 同来由の巻 同来由の巻  
 犬追物上覧の地 犬追物上覧の地  
 延冊翁舊跡 延冊翁舊跡  
 花法祭の巻 花法祭の巻  
 除夜吼火の巻 除夜吼火の巻  
 松竹安殿天 松竹安殿天  
 稻付静徳寺 稻付静徳寺  
 赤羽山八幡宮 赤羽山八幡宮  
 泉流湯 泉流湯  
 石井井川 石井井川  
 装束烏衣裳漬 装束烏衣裳漬  
 同新酒亭の巻 同新酒亭の巻  
 同合戦の巻 同合戦の巻  
 平塚明神社 平塚明神社  
 同河津院二番目 同河津院二番目  
 白鬚明神社 白鬚明神社  
 飛鳥山 飛鳥山  
 左浦入の巻 左浦入の巻  
 右田の巻 右田の巻

川口善光寺 川口善光寺  
 振永隊 振永隊  
 紀州明神社 紀州明神社  
 鍋匠の圖 鍋匠の圖  
 清光寺 清光寺  
 北花堂 北花堂  
 豊島の譯 豊島の譯  
 豊島康家清光之巻 豊島康家清光之巻  
 表文八幡宮 表文八幡宮  
 豊島 豊島  
 福徳寺 福徳寺



聖堂



新葉集 釋奠

かゝる人

びりーの

ふせ

うのゝ

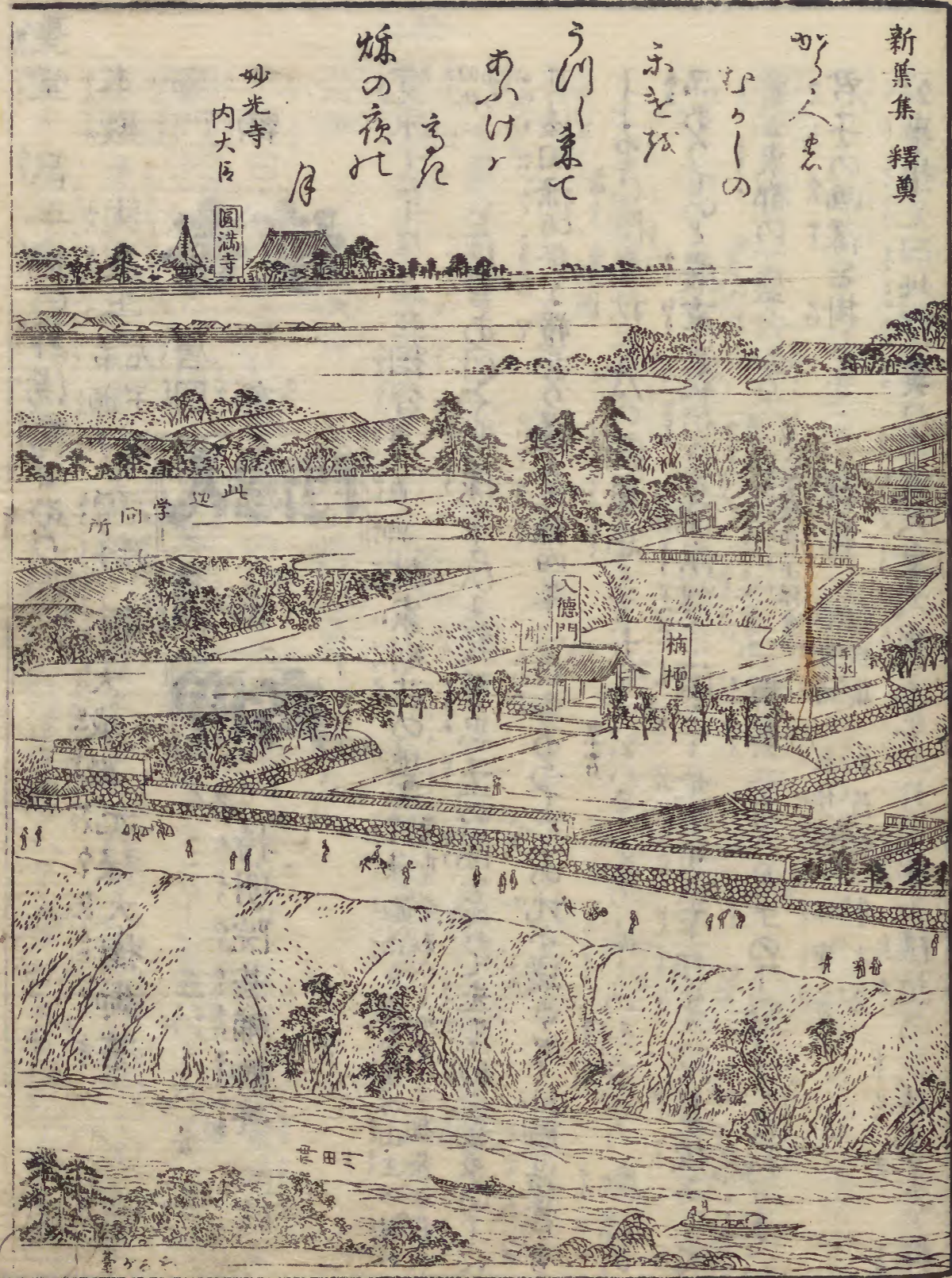
あけ

ま

煉の夜

月

妙光寺  
内大臣



聖堂 昌平橋の外湯島あり

本殿

文宣王

右 顔子 曾子 孟子 子思

額

大成殿 元禄大樹御筆

廊門

唐門

杏壇

人徳門

惣門

高仰

持明院基輔卿筆

寛永十年尾呂亞相公

義直卿

林家別荘の地

今東嶽山にあふ所の山王の社の前聖堂ありし地にして榊原が荘の

あり一廬を經營ありて聖像あり

比一廬を經營ありて聖像あり比一廬曾思子孟の像を置て先聖殿と號す

其後田禄の災は罹りて遂に元禄四年

台命ありて今の地を遷させし御造営有

いよと己降春秋二度の釋奠息ふとなり公のさうあり園の列侯より獻備の

品ありてと嚴重に執行の儒宗林祭酒世を是と司る奉邦第一の學校ありて

實に東都の一盛典あり寛政の今所造営あり釋奠二月八月上の下れ日に行る此日宋六

君子の画像を掛らふ從祀 程明道 程伊川 邵康節 張橫渠 周茂叔 朱文公

公事根元曰此釋奠の文武天皇大寶元年二月より始る禮記の王制小菜を釋

幣を奠て先師を禮せしあり此故に釋奠といふあり後漢明帝孔氏住宅に

幸して仲尼ありひよ七十二弟子を祠とみえたり又先聖といふ孔子といひ先師とい

顔回といふありの周公を先聖と云孔子を先師といひ申すは唐太宗貞觀二年より

あつたれ先聖先師といふ孔子顔回を申さるや又神護景雲二年孔子宣父を改

て文宣王と申すは弘仁格に見えあり續日本紀字令集解等

年中行事等合 釋奠 新葉集 同 ありんあむむれを祭らるるにそあひのたの夜乃月 二位中將 妙善寺内大臣

神田大明神社 聖堂の北あり唯一ありて江戸總鎮守と稱す

祭神 大己貴命 平親王將門靈 二坐

社傳曰人皇四十五代聖武天皇の御宇天平二年に鎮座ありて其を先柴崎村に

其舊社神田橋あり一頃中古荒廢し既し神燈絶あせとせし遊行上人等二世真

教坊東園遊化の砌に至り將門の靈を合て二座とし社の傍に宇井草庵に

むをび芝寄道場と號し今の浅草日輪寺是なり其後慶長八年當社を駿河臺より川

神田明神社

暮景集  
深夜の帰路と  
夕べの神田

社  
あふ  
と

鳴はれて

あふ  
と



はまの

あふ

あふ

夜半

あふ

あふ  
持次



元和二年又今の湯島にうつせらるる其儘舊號を用ひし神  
祭禮隔年九月十五日  
神事能  
江府神社の祭礼に永田馬場山王  
社第一の當社に次ぐれば  
十六日小真行に神祇の祭  
事あり九月十六日に真行あり  
神事能  
神祇の祭  
事あり九月十六日に真行あり  
神事能  
神祇の祭  
事あり九月十六日に真行あり

祭神  
五男三女  
素盞鳴尊  
大政所と稱せ六月七日南傳馬町旅所  
神幸同十四日歸輿あり  
奇稻田姫  
本御前と稱す六月十日小船町旅所  
神幸あり同十三日歸輿

風土記曰豊島郡江戸神社大寶二年壬寅所祭素盞鳴  
尊也神貢百束三字田云云  
當社の境内常み賑しく詣人も多し  
茶店各崖に臨むく遠眼鏡を  
とせし風系松ぼのなるざらと  
殊更近來の瑞籬み榊樹を  
あまた植たれば

弥生の頃最美觀たり

萬昌山圓滿寺  
湯島六丁目あり真言宗  
みして岡山も本食義高上人

なり奉尊十一面觀世音如意法尼の内傳あり  
弘法大師の内傳あり

み六親音と安置に當寺に世に本食寺と稱す

寺傳曰岡山本食義高上人を覺海と號し足利十三代將軍義輝公の孫

義辰の息あり  
義運の子孫あり  
日向國に産み幼より瑞相あり  
小仍て出家し

肥後國佐土原の福禪寺に入り覺深師に隨從し本食と稱せり  
寛文八年衆

生化益のために東奥より下りてあまねく靈地を添へて  
小堂宇を建立せ仁和

寺宮道永法親王此事を聞し召れ感稱ありて傳燈大阿闍梨權大僧都法印

み任せし其後西園に赴く頃も大に奇特を顯し延寶三年十月都小上り

堀河姉小跡多門寺に止宿あり頃微疾を患へ同四年正月廿一日自臨終の

期と知り時み諸の菩薩來現ありて示して曰唯今の汝が臨終の期みあ

らば早往生せんと思ひ猶大願成止普く衆生を化益せりと云  
云仍く同五年



神田明神

祭禮

大江山凱陣

東江源錦吉

隔年九月十五日

執行ふ氏子の

町くすくす練物車樂

出は中おも

大江山凱陣

牛若丸奥刃下

朝鮮人末朝の

あど孫遠近に聞て

其名高く

最

美観

たり





其三



深川  
 親和  
 七  
 氏  
 中子





其四





圓滿寺  
俗・本・食・寺  
と・ろ

江城湯島の地に至り彼佛の教に隨ひ諸人れ求に應じて無量を願ふ  
 成就し大に靈驗をあらわし同七年御室宮人參り行法の嚴重なるを  
 御感あつて高野山光臺院の住持職に任ぜられ又天和二年七月十三日  
 參内を頭中將隆真卿の傳奏ありて光臺院住持職勅し應に國家安  
 全寶祚延長を祈奉るべき旨倫旨賜ふ祖先の忠義に仍て名宗の又元  
 祿四年志願によりて光臺院を辭して江戸に對し本郷三組町に任ぜらる  
 其頃  
 大樹 常憲公とて淨光院殿須山女を以て御祈禱を仰附り本室永  
 六年上京に此時昇殿を許され同七年江戸湯島の地に梵刹を建  
 萬昌山圓滿寺と號し  
 大樹 文昭公の所志願より今多彈正少弼忠晴奉行たり則上人を以  
 て當寺の開山とて享保三年六月七日化縁の勅勅盡く終り春秋九十五歳  
 ありて遷化す以上開山傳の  
 畧と略

寶林山靈雲寺 大悲心院と號し圓滿寺の小社方にあり關東真言

律の惣奉寺ありて覺彦比丘の開基なり

灌頂堂 西界大日如來と安置し

大元堂 灌頂堂のうしろにあり奉尊大元明王の像ハ元祿大樹の街筆ハ

朝の後美和二年癸卯と経て小栗柄の常曉阿闍梨唐土ヨ

怨等の書見えり又延喜式玄蕃寮式曰凡大元帥法毎

鐘樓 覺彦和尚自銘を依り

寶林山靈雲寺 鑄鐘銘並序

武都北郊有一勝地四星可坐而算管祠良聳神鬼常作

擁衛士峯坤峙靈祇遙為鎮護東嶽天澤後聯鐘梵

互和葩戒聖堂前屹旭曛相映實武野之甲區者也

從四位下柳羽在公之暇嚮志眞乘常歎世季俗濶

篤佛之從不拘戒以故象教從設無益因啓二十幕

府堅請伽藍之地以囑貧道遂使今茲仲秋之二十幕

大將軍下旨賜許斯攸予乃夷榛莽卒初營構遐通

競趨緇白佐助自閏八初二始斧以至孟冬之半上

木之績候示告成從四位下牧野備後刺史源成貞

者時之復令工匠也覽而有感喜捨家貲命于鳧氏鏐成

斯寺之興起也者本是樓今月初四樓鐘偕就以惟

大將軍之興賜而二公醇信之所致也予欲使後生有

感于茲欽遵佛制力荷教法上以禱 台運無疆下

以增士民壽福也乃為銘曰 元帥賚地 實比布金

城北福庭 山號寶林 彌歷七旬 棟宇成森

作夫四集 役工日臨 命工作器 侈弁合程

牧野備公 為時股肱 賢聖畢萃 龍鬼熱醒

架樓突兀 乍響鏗鉤 迷夫天真 何有垠埒

聲雖本有 乍起乍滅 法音遍益

圓性融相 誰縛誰泄

元祿四辛未年孟冬 地藏堂 奉尊地藏菩薩 左右の脇檀弘法大師あり

開山諱の淨嚴字ハ覺彦妙極と號し河内錦部郡小西見村の産ハ

秦 寛永十六年己卯十一月廿三日氏ありに生ふ四蒙少て普門品尊勝大  
陀羅尼誦以奇標穎悟夙因の發る取之凡耳目の歴る前終は遺忘は  
事ふ衆人是を神童と稱す慶安元年戊子高野山檢校法印雲雪法禮  
して難陀寺に年十歳朝參暮詣倦事なく紀昶亞相公頼宣卿一彦  
見たすひく深く是は器ありと真みあれ方外千里の駒なりとのまふ  
遂に真言の諸流に秘奥を究む又餘暇あるは孔老を以諸子百家  
歴史等涉ぶるとる海あり常は法戦の場も臨む向の取敵がし貞享  
甲子冬錫を深尾に飛に其曉瑞雲ありて東を指其色赤黄みして長き  
と數十丈あれ和尚の法化將み東方に振えとるの兆あり一度東都  
ありてより法教は城の下に震ふ仍多和尚の道香公慕ひ牙子を禮法  
設厚くあれは遇はる輩をこれに元禄四年  
大将軍 常憲公 召見しひ普門品を講せむ雄辨泉の流あがごとく聴者  
欣然とて善と稱は遂に城小して地を賜ひ梵刹は經始はるまひく

佛殿僧房香厨厨廓豊と連れ巍然とて一精藍をたれ號く靈雲寺  
とて是往年の瑞は依りたる遂に密檀を建秘法を行講筵を鋪大密  
教を唱ふにをんと諸名匠衣を摺てあり至同五年壬申六月大元帥  
の大法を修し國家昇平を祈ふあれより以後毎歲三神通月七日後  
法を於ては永規とて翌年多麻郡の戸若子を割て香積に充開東真  
言律の僧統となしたまふ又乙亥は夏  
大将軍 常憲公 齋戒しひ大元帥金剛の像を畫き奉尊に  
下し賜ふ安置し奉ふ 同十年丁丑僧俗の請は依り曼陀羅を因く檀  
場に入者九万人み幾し 隔年灌頂を行ふ 既元禄十五年壬午六月廿七日  
諸徒召遺誠懇懃から我今法界三昧ふ入といひて恬然とく順化は  
世壽六十四僧臘二十七時は顔四十許色相怡悦とて平生は勝る師常ふ  
弘通を以て己が仕とて受取の助帛をこくと貯えは又みまりに費さば佛像  
と造り聖教を索め堂塔を構貧窮を濟ふ若後經論を講説せられたる二百

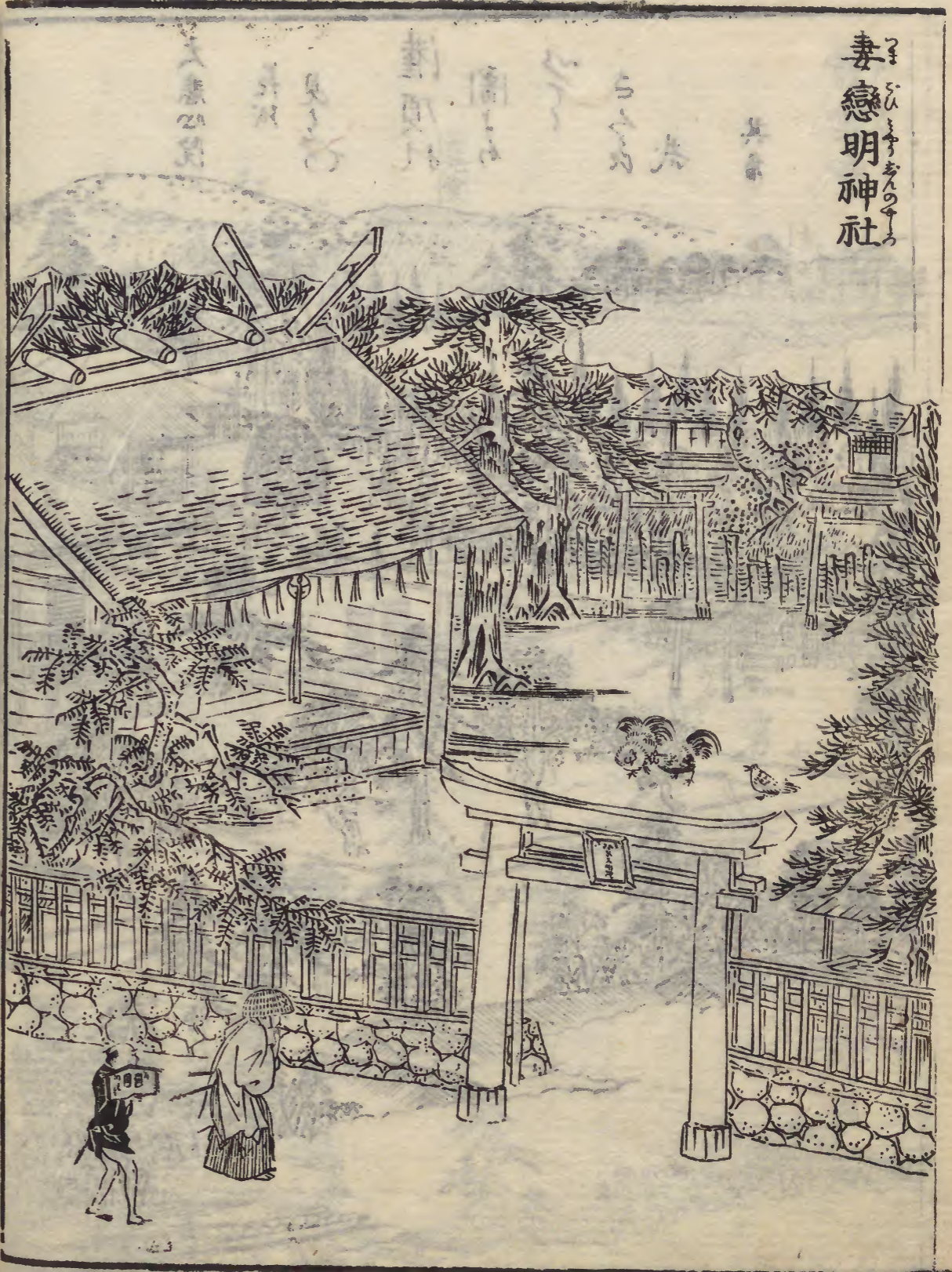
大悲心院  
 花松  
 見  
 灌頂  
 高  
 共角  
 さ  
 共角



靈雲寺  
 方丈



妻戀明神社



三十六會殆三十席秘軌と授ふこと五回著述を於所の書三百卷余度  
 於處の僧尼四百三十六人具足戒を受ふ者十有三人阿耨梨と得る者二百六  
 十人受明灌頂は受ふ者一千六百三十一人菩薩戒を受ふ者一萬五  
 千人其餘の法化の奉て數ふるは往哲のいま發せざるを發し先賢  
 を明かりしはあはれは法化洋々として天下に彌布し王公を  
 下愚夫蠢婦に至る迄敬仰せむといふことあり今古のあはれなる所  
 實は總持復古の師なり 以上當寺開山傳の要を摘ぐるに記す  
 妻戀大明神社 妻戀坂の上にある方治年中回祿ありて後今の妻戀臺  
 へ遷らせり

祭神 第一殿 倉稻魂神 第二殿 日本武尊 第三殿 弟橘媛命

社傳曰當社を往昔日本武尊東征の頃行宮の地ありと云々  
按に日本紀より日本武尊東夷征伐の時妃弟橘媛海水に入て  
 此處に身を沈めし事と深くあはれなるに歸路に建んで上野國  
 碓日嶺に登り東南の方と望まむに五幡者耶と宣ふよし見ゆ  
 征の時行宮の地ありと云々



妻戀明神と号す。今稻荷明神と云ふは社の號也。  
稱せられたるは、後世合祭せられたる故也。

往昔社地も妻戀墓の下にありて境内をゆるぎ廣く、に教度  
を兵火に罹りて大に荒廢し、今に僅かに社を築き、時、天正

年中、（一） 台命、（二） 神君當社は祈願の事ありて新に二丁四方の社地を賜ふ。又寛永五年

神君の御像を別社に鎮座せし、先終、（三） 湯島天満宮、妻戀明神の社にあり、太田道灌は戸の静勝軒あり、頃

者あり、乃、夢中に菅神は謁見せ、翌朝外に菅丞相親筆の函係を携來す。  
六月五日、

官社神影と安置し、且梅樹數百株と栽、美園等と附せ、即當社是あり。  
以上諸社一覽、江戸名所記等の書に出るとも、

武藏野の遠望を懸たるに寒村の道に、野梅盛り、薫ば、  
北國の圖にあり、湯島といふ所あり、古松を栽り、  
武藏野の遠望を懸たるに寒村の道に、野梅盛り、薫ば、

湯島神社、（一） 風土記曰、豊島郡湯島神社、雄略天皇御宇二年癸巳、  
八月、月自官所祭、天手力雄神也、（二） 同所北の方よりあり、臨濟宗江戸四箇寺の一なり、  
天澤山麟祥院、（三） 恩山天澤寺と稱せしが春日局の奉尊、（四） 釋迦如来、（五） 因山、（六） 渭川、（七） 劉和尚、  
法号を取、麟祥院とあり、（八） 京師花園妙心寺、（九） 本願、（十） 春日局あり、（十一） 三代大將軍の御乳母、（十二） 人齋藤利三、  
を招り、（十三） 十八年九月十四日、六十五歳、（十四） 麟祥院殿、（十五） 二位、（十六） 義大姉と号し、

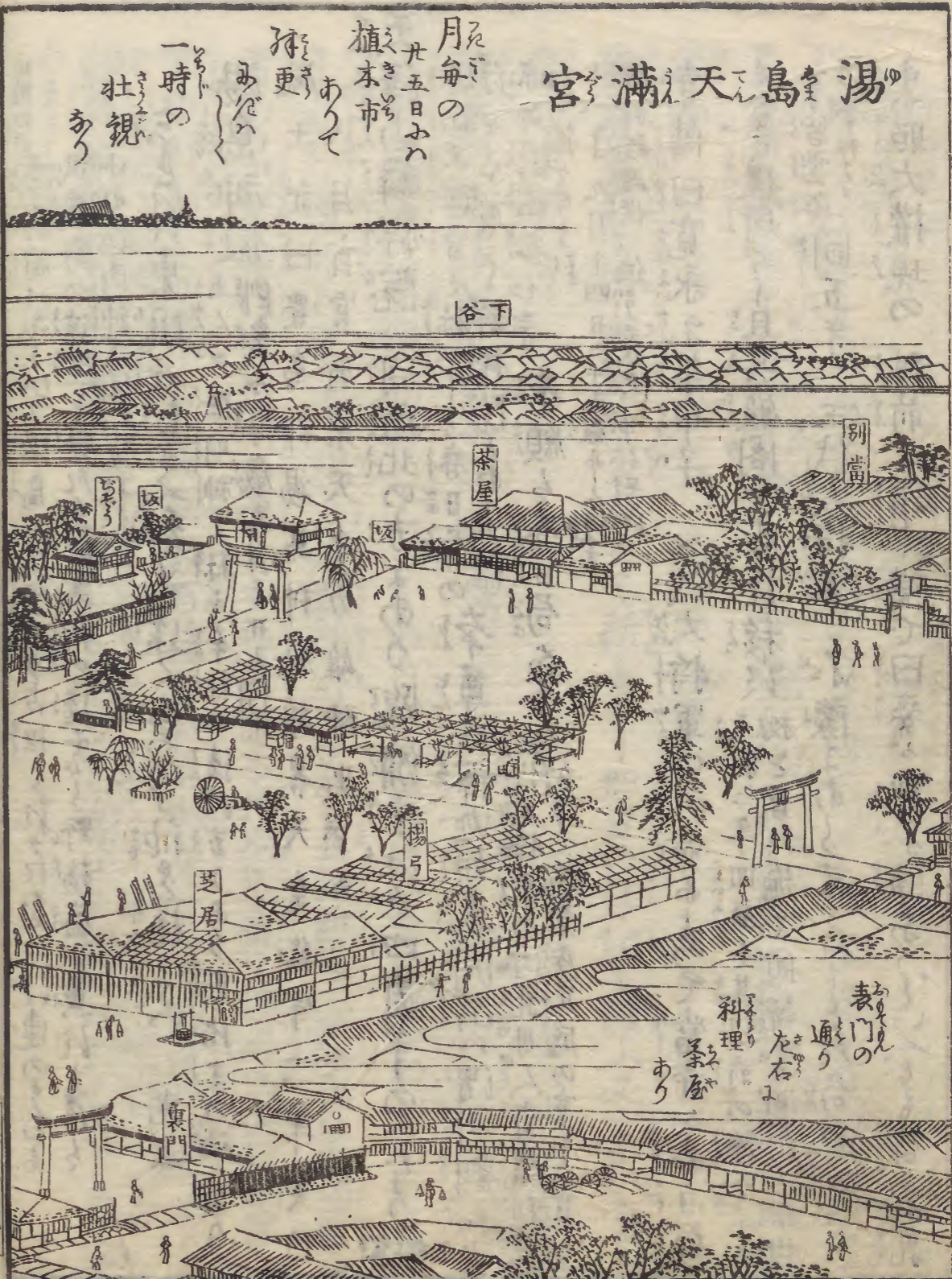
寺傳曰、寛永元年甲子、二代大將軍の命ありて、當寺を春日局  
を菩提所と、且其殿閣をあらに移し、天和二年、（十七） 同五年、（十八） 三代大將軍、（十九） 不豫ありて、（二十） 東照大權現の神前、（二十一） 詣り、（二十二） 禱て、（二十三） 日、（二十四） 妾が身不浄ありと、（二十五） 苛を乳

の筆を、（二十六） 同五年、（二十七） 三代大將軍、（二十八） 不豫ありて、（二十九） 東照大權現の神前、（三十） 詣り、（三十一） 禱て、（三十二） 日、（三十三） 妾が身不浄ありと、（三十四） 苛を乳

東照大權現の神前、（三十五） 詣り、（三十六） 禱て、（三十七） 日、（三十八） 妾が身不浄ありと、（三十九） 苛を乳

東照大權現の神前、（四十） 詣り、（四十一） 禱て、（四十二） 日、（四十三） 妾が身不浄ありと、（四十四） 苛を乳

東照大權現の神前、（四十五） 詣り、（四十六） 禱て、（四十七） 日、（四十八） 妾が身不浄ありと、（四十九） 苛を乳







根生院

本堂

方丈

味と奉<sup>たて</sup>乳母の称を汚<sup>けが</sup>し歳月祠奉<sup>まつ</sup>れり且將軍の萬民を父母<sup>ふが</sup>と  
若今大故あふとれを國家の安危<sup>あんき</sup>にわたり因<sup>よ</sup>願<sup>ねが</sup>ひの妾が身を以<sup>もつ</sup>  
是<sup>これ</sup>に替<sup>か</sup>り奉<sup>まつ</sup>らむ若快復あらしめば忽<sup>たちまち</sup>に身<sup>み</sup>病<sup>びやう</sup>苦<sup>く</sup>と受<sup>う</sup>誓<sup>ちか</sup>て醫<sup>い</sup>藥<sup>やく</sup>  
を用<sup>もち</sup>むして死<sup>し</sup>せむと云<sup>い</sup>其衷誠正<sup>そのちゆうせい</sup>に感應ありて日を経<sup>へ</sup>む常<sup>じょう</sup>にあ<sup>あ</sup>せ  
たまふ仍<sup>なほ</sup>身<sup>み</sup>を終<sup>お</sup>ふまで針灸藥餌を用<sup>もち</sup>ひば同六年洛<sup>らく</sup>より上<sup>のぼ</sup>り春<sup>はる</sup>内<sup>うち</sup>  
以西三条大納言實條卿兄弟<sup>しじょうけいけい</sup>準<sup>あ</sup>せられ春日局の号<sup>ごう</sup>を賜<sup>たま</sup>ふ遂<sup>つひ</sup>に  
天顏<sup>てんげん</sup>後水尾帝<sup>ごみづおの</sup>と拜<sup>まが</sup>し天<sup>てん</sup>盃<sup>はい</sup>を頂<sup>ちやう</sup>戴<sup>たい</sup>む此時良尚親王ありび實條卿  
光廣卿<sup>こうくわうけい</sup>と和哥<sup>わが</sup>を贈<sup>くわ</sup>る

春日山其名<sup>そのな</sup>代<sup>しろ</sup>もみあ<sup>あ</sup>りて美代<sup>みしろ</sup>の松<sup>まつ</sup>の風<sup>かぜ</sup>も良尚親王  
かま<sup>か</sup>の世<sup>よ</sup>の名<sup>な</sup>ありれ名<sup>な</sup>あり業<sup>わざ</sup>れ<sup>れ</sup>の世<sup>よ</sup>も世<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>りれん 實條卿

心<sup>こころ</sup>たり君<sup>きみ</sup>の海<sup>うみ</sup>のりれ春日局の心<sup>こころ</sup>は朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>を光<sup>ひかり</sup>せり  
其外<sup>そのほか</sup>奉<sup>まつ</sup>白<sup>しろ</sup>集<sup>しゅう</sup>に大山長嘯<sup>おほやまながせう</sup>子<sup>こ</sup>を賜<sup>たま</sup>らり野<sup>の</sup>の東<sup>とう</sup>都<sup>と</sup>下<sup>げ</sup>向<sup>むか</sup>議<sup>ぎ</sup>列<sup>れつ</sup>の和哥<sup>わが</sup>詞<sup>し</sup>書<sup>しょ</sup>等<sup>ら</sup>  
あれどもまにに畧<sup>りやく</sup>す 光廣卿

同九年 台命<sup>たいめい</sup>は依<sup>よ</sup>り再び洛<sup>らく</sup>より上<sup>のぼ</sup>り 女帝<sup>にょてい</sup>明<sup>めい</sup>正<sup>せい</sup>帝<sup>てい</sup>と拜<sup>まが</sup>し奉<sup>まつ</sup>ら

後<sup>のち</sup>勤<sup>きん</sup>勞<sup>らう</sup>歸<sup>き</sup>体<sup>たい</sup>のため代<sup>しろ</sup>官<sup>くわん</sup>町<sup>ちやう</sup>宅<sup>たく</sup>地<sup>ち</sup>を賜<sup>たま</sup>ひ從<sup>より</sup>二位<sup>に</sup>み叙<sup>じよ</sup>せり  
景<sup>けい</sup>堂<sup>だう</sup>の生<sup>せい</sup>前<sup>ぜん</sup>後<sup>ご</sup>東<sup>とう</sup>と著<sup>ちやく</sup>せり茶<sup>ちや</sup>と目<sup>め</sup>のありに寫<sup>しやう</sup>せり儀<sup>ぎ</sup>たり表<sup>ひょう</sup>装<sup>さう</sup>も  
大將軍<sup>たいしやうぐん</sup>命<sup>めい</sup>せり唐<sup>たう</sup>草<sup>そう</sup>の純<sup>じゆん</sup>子<sup>こ</sup>に卅<sup>じやう</sup>壽<sup>じゆ</sup>の字<sup>じ</sup>を織<sup>お</sup>入<sup>い</sup>り毎<sup>まい</sup>年<sup>ねん</sup>九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>十<sup>じゆ</sup>四<sup>し</sup>日<sup>にち</sup>忌<sup>き</sup>  
金剛寶山根生密院<sup>こんがうほうざんこんせいみつえん</sup>延壽寺<sup>えんじゆじ</sup>と號<sup>ごう</sup>を同<sup>どう</sup>東<sup>とう</sup>の方<sup>かた</sup>にあ<sup>あ</sup>り真<sup>ま</sup>言<sup>げん</sup>新<sup>しん</sup>義<sup>ぎ</sup>江<sup>え</sup>戸<sup>こ</sup>  
四箇寺<sup>しごんじ</sup>の一<sup>いつ</sup>みして寛<sup>くわん</sup>永<sup>えい</sup>れ始<sup>はじめ</sup> 御<sup>ご</sup>祈<sup>き</sup>願<sup>げん</sup>所<sup>じよ</sup>に 命<sup>めい</sup>せり於<sup>お</sup>奉<sup>まつ</sup>尊<sup>そん</sup>藥<sup>やく</sup>師<sup>し</sup>如<sup>に</sup>  
亦<sup>また</sup>佛<sup>ぶつ</sup>二<sup>に</sup>春<sup>はる</sup>日<sup>にち</sup>作<sup>しやく</sup>脇<sup>わき</sup>檀<sup>だん</sup>に十二<sup>じふに</sup>神<sup>かみ</sup>持<sup>ぢ</sup>の像<sup>ざう</sup>を置<sup>お</sup>堂<sup>だう</sup>誓<sup>ちか</sup>法<sup>ぽう</sup>印<sup>いん</sup> 猶<sup>なほ</sup>子<sup>こ</sup>あり 法<sup>ぽう</sup>と云<sup>い</sup>り

不忍池<sup>おしのいけ</sup>又<sup>また</sup>篠<sup>しの</sup>輪<sup>りん</sup>津<sup>つ</sup> 東<sup>とう</sup>叡<sup>い</sup>山<sup>さん</sup>の西<sup>せい</sup>之<sup>の</sup>麓<sup>ろく</sup>あり江<sup>え</sup>州<sup>しゅう</sup>琵琶<sup>びや</sup>湖<sup>こ</sup>に比<sup>ひ</sup>む 不忍<sup>おしの</sup>とハ忍<sup>しの</sup>の園<sup>のん</sup>に  
廣<sup>ひろ</sup>方<sup>かた</sup>十<sup>じゆ</sup>丁<sup>ちやう</sup>許<sup>こ</sup>池<sup>いけ</sup>水<sup>みづ</sup>深<sup>ふか</sup>くして旱<sup>せん</sup>魃<sup>ちやく</sup>も涸<sup>か</sup>るる殊<sup>こと</sup>蓮<sup>れん</sup>多<sup>た</sup>く花<sup>はな</sup>の頂<sup>たか</sup>ハ紅<sup>こう</sup>白<sup>はく</sup>咲<sup>さ</sup>乱<sup>らん</sup>す  
天<sup>てん</sup>女<sup>にょ</sup>の宮<sup>みや</sup>居<sup>い</sup>ハれ蓮<sup>れん</sup>の上<sup>のうへ</sup>湧<sup>ゆ</sup>出<sup>で</sup>るが如<sup>ごと</sup>其<sup>その</sup>芬<sup>ぶん</sup>芳<sup>ほう</sup>遠<sup>えん</sup>近<sup>きん</sup>の人<sup>ひと</sup>乃<sup>すなは</sup>袂<sup>たもと</sup>を籠<sup>かご</sup>へ

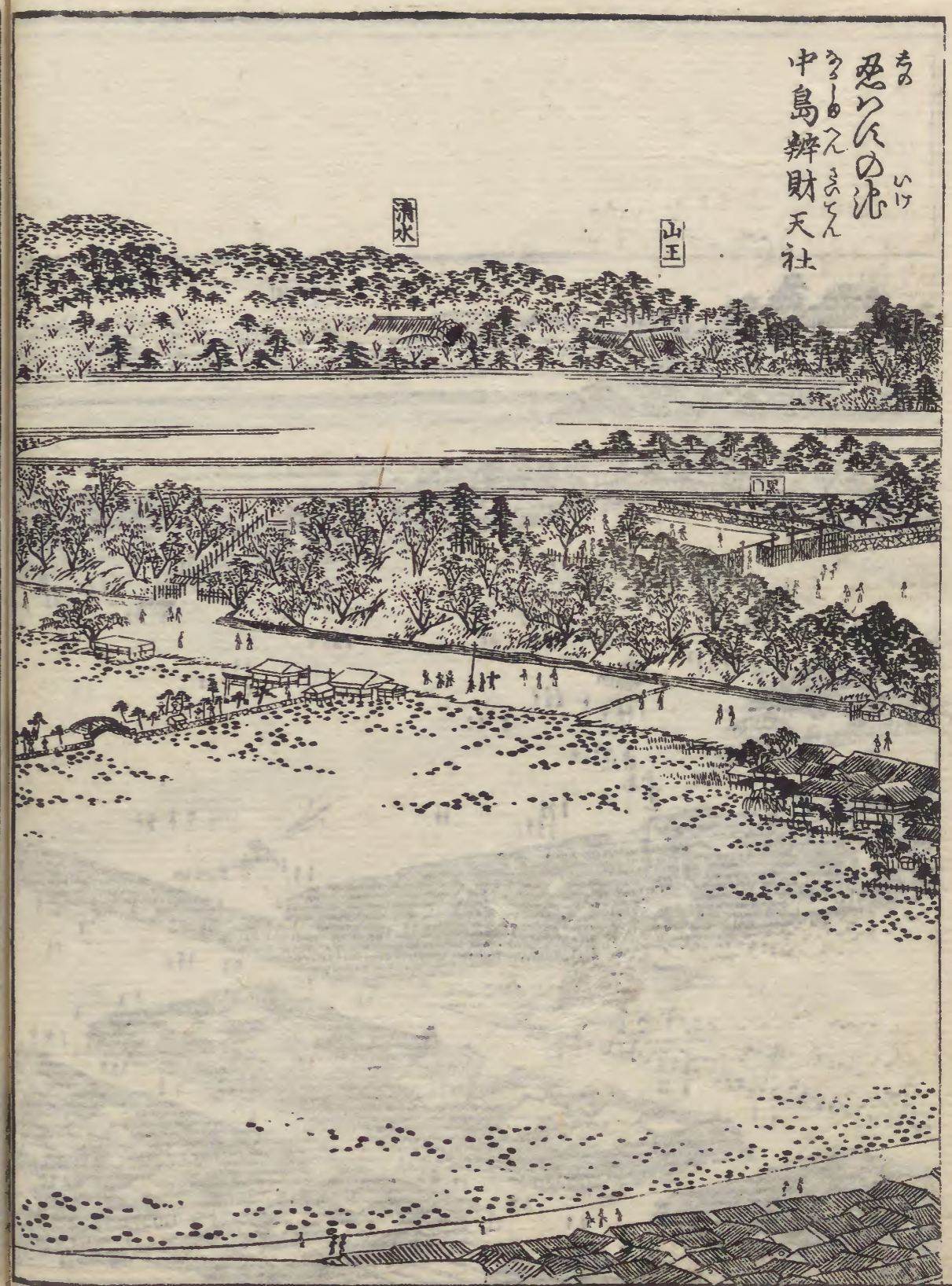
風<sup>かぜ</sup>土<sup>つち</sup>記<sup>き</sup>曰<sup>いは</sup>豊<sup>ゆほう</sup>島<sup>しま</sup>郡<sup>ぐん</sup>篠<sup>しの</sup>輪<sup>りん</sup>津<sup>つ</sup>池<sup>いけ</sup>貢<sup>くわん</sup>鯉<sup>り</sup>鮒<sup>ふ</sup>鰻<sup>うなぎ</sup>魚<sup>いそ</sup>鴻<sup>こう</sup>雁<sup>えん</sup>鶴<sup>かく</sup>鷺<sup>ろ</sup>鷺<sup>ろ</sup>  
鴨<sup>鴨</sup>等<sup>ら</sup>周<sup>しゅう</sup>行<sup>かう</sup>十<sup>じゆ</sup>里<sup>り</sup>許<sup>こ</sup>程<sup>ほど</sup>早<sup>はや</sup>日<sup>にち</sup>水<sup>みづ</sup>不<sup>ふ</sup>涸<sup>か</sup>霖<sup>りん</sup>雨<sup>う</sup>不<sup>ふ</sup>爲<sup>な</sup>害<sup>がい</sup>祈<sup>いの</sup>享<sup>かう</sup>  
雨<sup>あめ</sup>人<sup>ひと</sup>詣<sup>よ</sup>り茲<sup>こゝ</sup>所<sup>じよ</sup>祭<sup>まつり</sup>瀬<sup>せ</sup>織<sup>お</sup>津<sup>つ</sup>比<sup>ひ</sup>咩<sup>い</sup>也<sup>なり</sup>云<sup>い</sup> 中<sup>なかつ</sup>島<sup>しま</sup>辨<sup>べん</sup>財<sup>さい</sup>天<sup>てん</sup> 不<sup>ふ</sup>忍<sup>しの</sup>池<sup>いけ</sup>の中<sup>なか</sup>島<sup>しま</sup>あり當<sup>あた</sup>社<sup>しゃ</sup>々<sup>々</sup>江<sup>え</sup>加<sup>か</sup>竹<sup>ちやく</sup>生<sup>せい</sup>島<sup>しま</sup>のうらみ





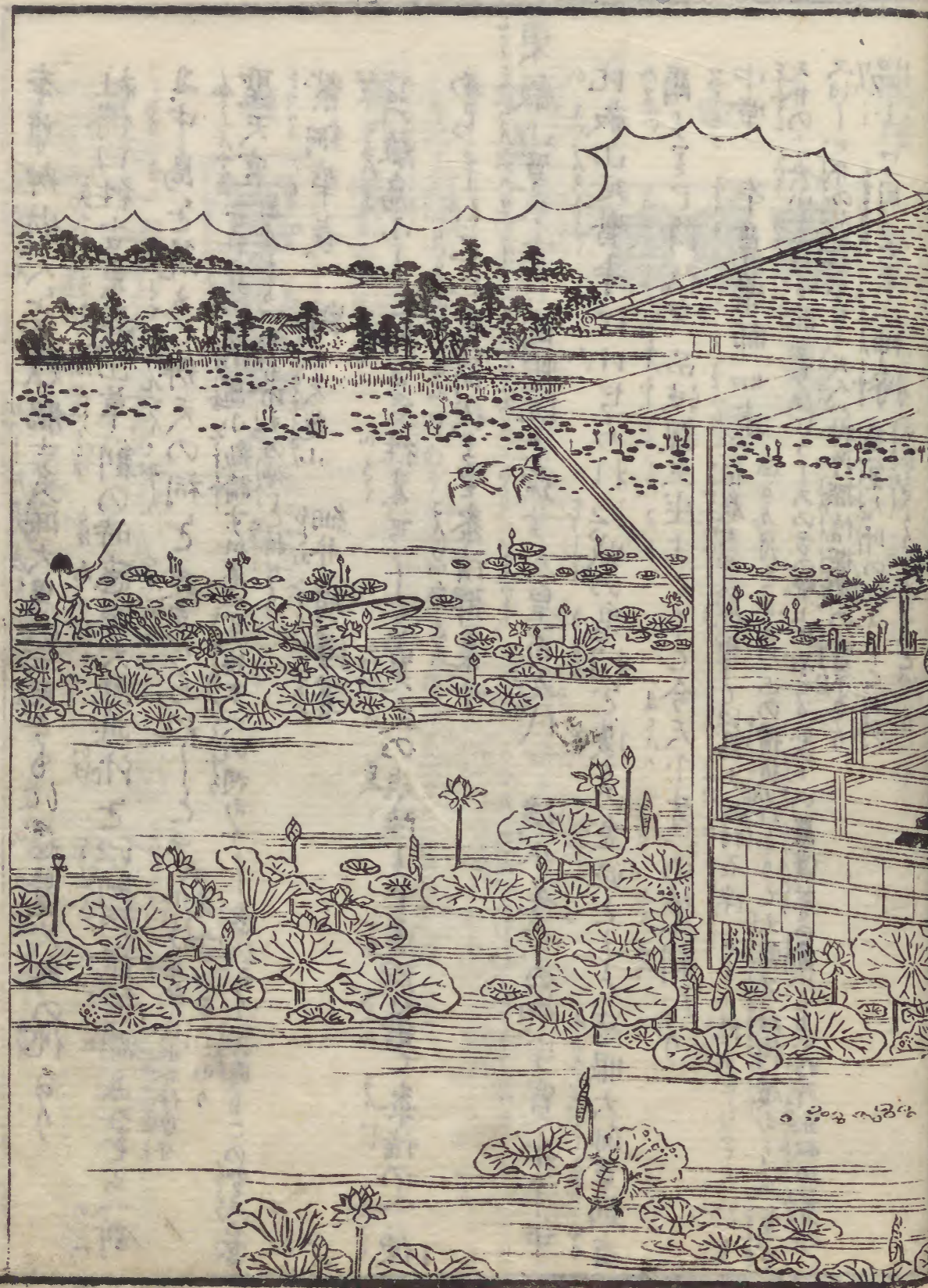
東叡山黒門前  
 三橋川  
 橋





あ  
忍  
り  
の  
池  
い  
ら  
ま  
も  
え  
ま  
え  
ん  
中島辨財天社





夫のそよひの  
 不忍池  
 蓮見

夫のそよひの  
 不忍池の  
 蓮見  
 蓮は夏月には  
 赤系も多し  
 又蕃行は  
 色とりどり  
 観蓮は  
 蓮を  
 観る  
 の  
 清観とす



奉尊辨財天と云ひ脇士多聞大黒の二天とも慈覺大師の他あり

社傳曰往古東叡山草創の時慈覺大師此池を江列の琵琶湖みかちら新

又中島を筑立て辨天の祠を建立せられと云云

聖天宮 奉社の北の小島小勸請す此島其始安天の祠あり

紫銅華表 額 天龍山 細井廣澤筆

昔離島小にて松よと往末とを寛文の未陸より道以築て糸情の人便

わらひ己巳日の前夜より糸情群集す

東叡山寛永寺 圓頓院と號す人皇百九代 後水尾帝の御宇寛永年中

比叡山延曆寺に比せられ以城の鬼門を護るの靈區として慈覺大師草創有

爾より己降代々一品法親王座主として今天下才一の林刹たり

中堂 奉尊樂師如末 傳教大師の他中にて加夫建村石津とあり

天井の中央小畫ける龍ありひにうのの壁に添はるる六羅漢等の像へとも

脇士 日月二大寺二神將 慈覺大師の他うて羽別

脇壇 不動明王 智澄大師の他 多聞天 定朔の作

# 瑞瑤殿

靈元は皇震筆

竹臺 席門のうらたにあり昔慈覺大師入唐の時五臺山の竹を根うに携へて歸朝の  
てとす 盧屋とよる書を見えきり世にこの竹と山玉推況と云ふ八百萬神の駢向不あり  
ともう又同したを小き源あり石楠を植きり諸夜又夜又女の駢向不ありと云ふ  
天井の中央小畫ける龍ありひにうのの壁に添はるる六羅漢等の像へとも  
探雪の兩筆あり

# 寛光堂

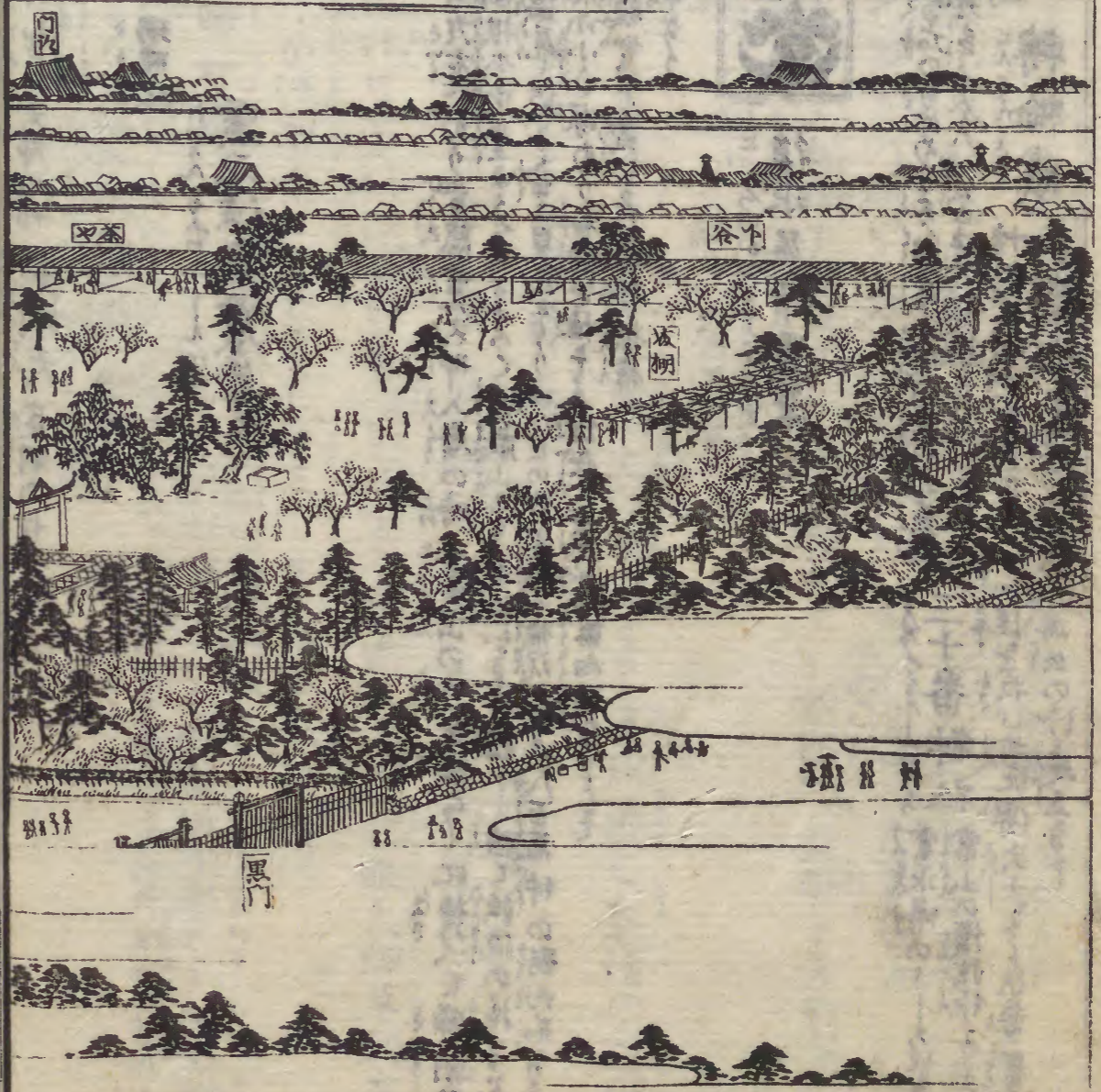
後水尾帝震筆

雲水塔 中堂の傍にあり昔慈覺大師入唐の時五臺山の竹を根うに携へて歸朝の  
定山慈覺大師建立 轉輪藏 中堂の前の方より一切徑を収む前に傳大士と云ふ普賢  
ありと云ふ

東廠山上陽春衣  
 東廠山下背花歸  
 回看終日酣歌處  
 風起晚來爲雲飛



東廠山寛永寺  
 橋ヶ峯  
 山王社  
 山内橋樹多き中  
 小も山辺と橋ヶ峯  
 と吾もむじ羅山  
 先生裁ちあふさし  
 警書事文集のり



其二

清水観音堂  
秋色楊

秋民楊ハ清水堂の  
沖供所搦のうら  
井のわさこらうり  
荒れ一程うと虎尾  
と梅すりの懸あり  
中須江府の高戸  
何某の女秋及と  
いふりの花のころ  
らふより井戸の  
の楊のみみしほの  
磯といふ秀也  
のり

名つくと  
らん



木のりこ

けも

鈴も

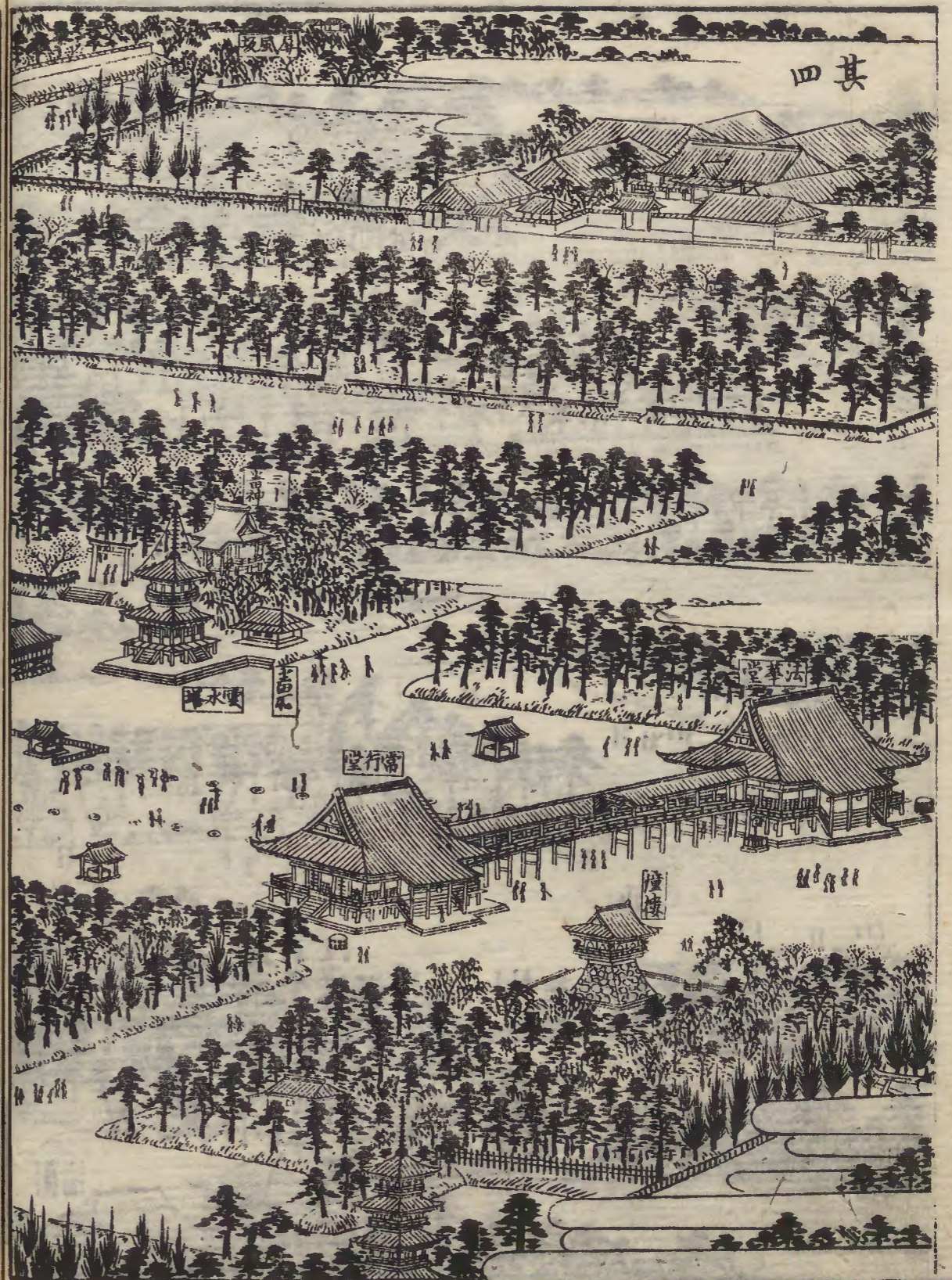
ささ

りみ

芭蕉









忍岡縮新社



法華堂

中堂の前のありあり普賢菩薩と梵を舞勢四月常行堂あり

筆

世の温盤の画と云ふなり此堂ハ尾州之の建立なり

鐘樓

摩多羅神常行堂の中ハ現れて曰く我々を復ると云ふ仍て國航はるる

東

照力大成神君之原欲奉營誠是靈區也叡山大僧正天海

大

一感保相為神塔寶濟卿祖之照告江武  
天應其國奉意謹池々共廟力大官城州  
之之黃公祝風奉朝各繼大成神相良東  
曙理耆之霜有日瓦甍猶新如峙于空似涌自地然今

感應之曙色喉鶴應霜永延之遐齡庶幾乎  
保其國之公祝風有日瓦甍猶新如峙于空似涌自地然今  
相奉意謹池々共廟力大官城州  
為神塔寶濟卿祖之照告江武  
神意謹池々共廟力大官城州  
塔寶濟卿祖之照告江武  
寶濟卿祖之照告江武  
濟卿祖之照告江武  
卿祖之照告江武  
祖之照告江武  
之照告江武  
照告江武  
告江武  
江武



神不在風威乎銘之大鳴君道臣道唱而後和懇禱之趣  
東州寶池上方銀界  
德同塵銅常不語恠  
陶鑪聞朝警暮誠  
聲祝遠開脫出鑪誠  
仰家壽久福集辛未秋九月日  
國永八年龍集辛未秋九月日  
寬永八年龍集辛未秋九月日

東照大權現宮 大石燈籠  
治一 太田駿河守  
東照大權現宮 大石燈籠 一丈二尺棹石三冊京師南禪寺尾州縣田  
社と山とありて日本小三の大山燈籠ありて其の造りては  
大佛殿 本堂 浄土堂 二世無相院 甚徳堂 ありて  
三尊の現世過去未來の三世と表せり昔 大明院の御縁ありて  
白く 浄土堂 ありて

東照大權現宮 大石燈籠  
治一 太田駿河守  
東照大權現宮 大石燈籠 一丈二尺棹石三冊京師南禪寺尾州縣田  
社と山とありて日本小三の大山燈籠ありて其の造りては  
大佛殿 本堂 浄土堂 二世無相院 甚徳堂 ありて  
三尊の現世過去未來の三世と表せり昔 大明院の御縁ありて  
白く 浄土堂 ありて

額 吉祥閣  
大明院宮公辦法親王真筆  
忍岡稻荷祠 文殊樓の左あり石崖の上小綱ありたふ世俗穴稻荷と号く當山草創の  
記せり淨雲の号あり又或は浄雲の号ありて浄雲の号ありて浄雲の号ありて浄雲の号ありて  
清水觀音堂 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
斬首の罪不處せらるる浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
山王大権現社 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
勸學寮 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
檀所なり 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
天和四年小建立を中一代経と收め時陽興禪刹の定後師經山寺より齋來あり

忍岡稻荷祠 文殊樓の左あり石崖の上小綱ありたふ世俗穴稻荷と号く當山草創の  
記せり淨雲の号あり又或は浄雲の号ありて浄雲の号ありて浄雲の号ありて浄雲の号ありて  
清水觀音堂 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
斬首の罪不處せらるる浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
山王大権現社 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
勸學寮 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
檀所なり 浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり浄土堂の南あり  
天和四年小建立を中一代経と收め時陽興禪刹の定後師經山寺より齋來あり

東叡山

勸学寮圖



三聖人の古銅像と劫を屋上より樹底に至るまで悉く銅葉とて包裏せし其四方に石  
 疊とて石大木尚あり二親養父母なるも又自居居士の石塔とて造立し傍に佛の石像  
 あり同石壁の外小道の碑を建たり又八葉の泉和尚とて撰と  
 武州東叡山勸学寮講院了翁僧都道行碑記  
 自古法中大山沙門播名而德於天下者豈苟然哉  
 不皆是以菩薩乘願下人成於世無上今東都至真度  
 萬行域此天妙行使未易以言也若今東門方便學  
 聖之域此僧都妙行其律不自其儀白為沙門露不  
 講院了翁僧都妙行其律不自其儀白為沙門露不  
 大乘心行善關山隱老及吾唐諸識僧俗而宿能  
 親近黃檗開行老及吾唐諸識僧俗而宿能  
 以己憂唯之憂佛法不興於世而識僧俗而宿能  
 盡諸佛祖之憂佛法不興於世而識僧俗而宿能  
 中築徑三聖像乃明戒師得自雙徑益古銅像也  
 內奉塔左其右立其戒師得自雙徑益古銅像也  
 藏之後僧塚九百如師得自雙徑益古銅像也  
 本院不講云東中西有文庫藏如師得自雙徑益古銅像也  
 示設一者講堂三聖設釋迦如來而講教之本籍又  
 別聽者一講堂三聖設釋迦如來而講教之本籍又  
 人方丈知三聖設釋迦如來而講教之本籍又  
 前有餘丈三聖設釋迦如來而講教之本籍又  
 子其方丈三聖設釋迦如來而講教之本籍又  
 預備餘丈三聖設釋迦如來而講教之本籍又  
 不壞而衆安身道無風雨之憂  
 不壞而衆安身道無風雨之憂

安我學成則足俗圓方袍也於乎大之為僧也則  
成塵出俗圓方袍也於乎大之為僧也則  
脫自天不聞佛事而臣王侯捨得而高  
飄然未足豈菩提若僧都名者謂知本矣乎若  
矣是則成夫四眾莫不盡其大願國師散於三  
公則大行所積淨矣年來又贖為虎關之經嘗  
法間以苦行十藏矣旨住黃所益之願師散於  
載大凡二春及因予奉藏矣年來又贖為虎關  
院今藍以薄合山子院但樓有未嘗嫌事年  
然佛行則已至策蒲鞋以院小樓有未嘗嫌事  
飯以道行僧都終不致病交曰垂老勤頭陀不  
非佛之春嚴因波乎都與僧恩遂到院契已而  
其講院今之嚴因波乎都與僧恩遂到院契已而  
之大立院今之嚴因波乎都與僧恩遂到院契已而  
元祿行勸後賢云所罕有僧恩遂到院契已而  
元祿行勸後賢云所罕有僧恩遂到院契已而

勸學坊了翁僧都 其俗性ハ冷木氏羽尾勝郡八幡村の産あり寛永七年庚午三月十日  
總泉禪寺に入て住持となりて一歳より一歳親族とて居たりしを以て維新の初め  
それ一切撤去ハル來の行跡ヲ見たりて天の眼目より其心ヲ照らし其志願の成結と  
りて正保元年甲申歲住持守ハ備官小僧一人心志願の成結と行りたること人共  
勸學坊了翁僧都 其俗性ハ冷木氏羽尾勝郡八幡村の産あり寛永七年庚午三月十日  
總泉禪寺に入て住持となりて一歳より一歳親族とて居たりしを以て維新の初め  
それ一切撤去ハル來の行跡ヲ見たりて天の眼目より其心ヲ照らし其志願の成結と  
りて正保元年甲申歲住持守ハ備官小僧一人心志願の成結と行りたること人共

禪刹の宛山は定禪師の示現よりて佛袋山の靈方と製一布店とひらここれと常  
六年と経て其價の余洋金三三兩と得たりと云ふとて寛文十年庚戌歲一思ハすの作  
中島よりて地を賜ひわたり一島と築き一宇を建てて藏經全邦安んずるといふ  
よそ其地較園あたは佛袋山と曰ふ二百八人の徒々天和二年歲五又新藏山の中りては五  
餘同の地を賜ひ勸學寮と建ます院宇三層四万二千戸の寮舎と設く又三宇れ文庫と建  
佛老ニ教とすひ佛漢の群籍と收藏とす幸すて三百余巻ありすれをちあつたりの  
其功の大なるを序感ありて字願齋堂とて般若心經と佛説法華經と一光行門王  
頻りに二年高野山光聖院と一藏庫と置仁和寺門主所感賞ありて勸學坊權大僧都  
法印小住せしむるに事なり

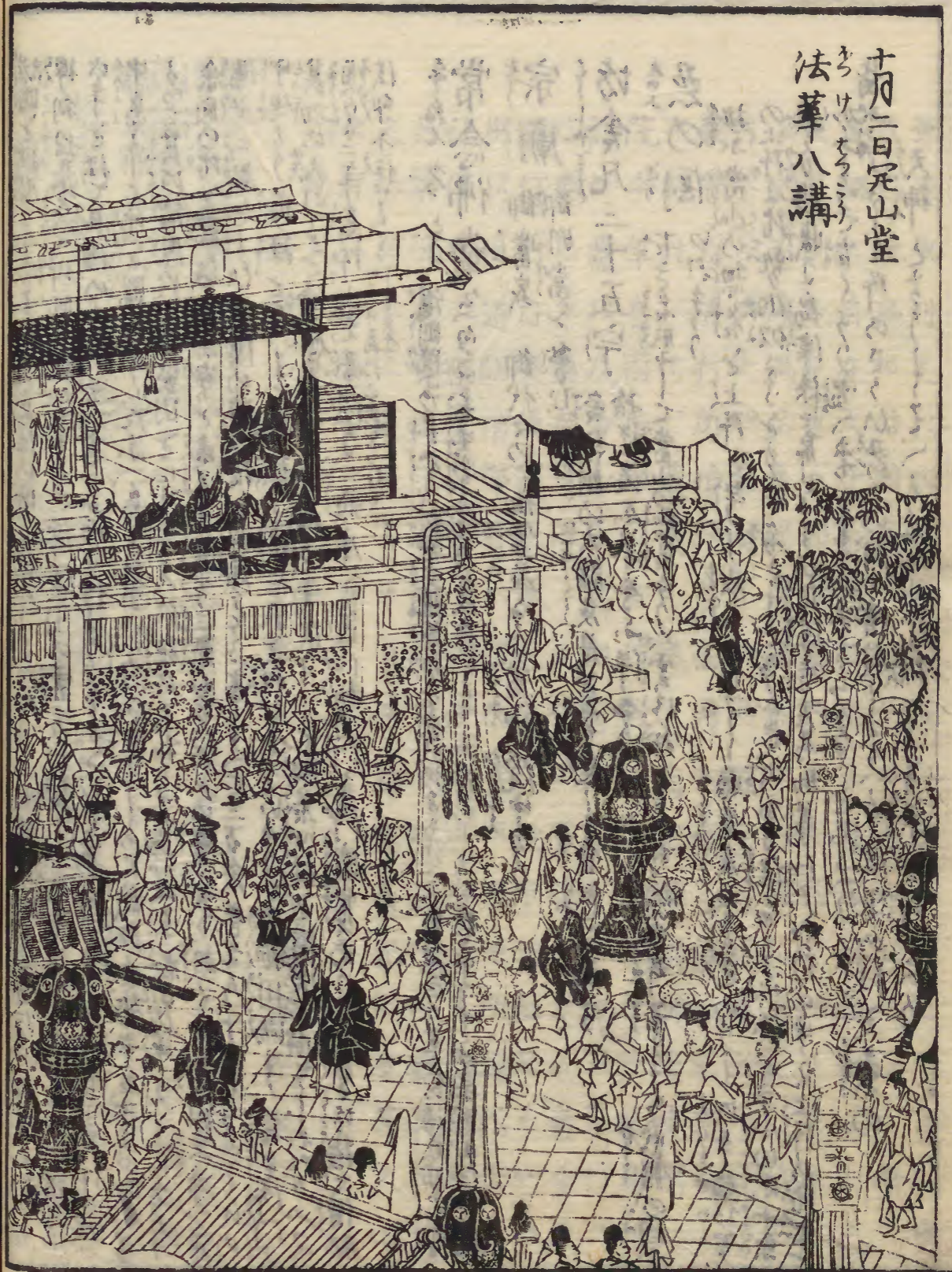
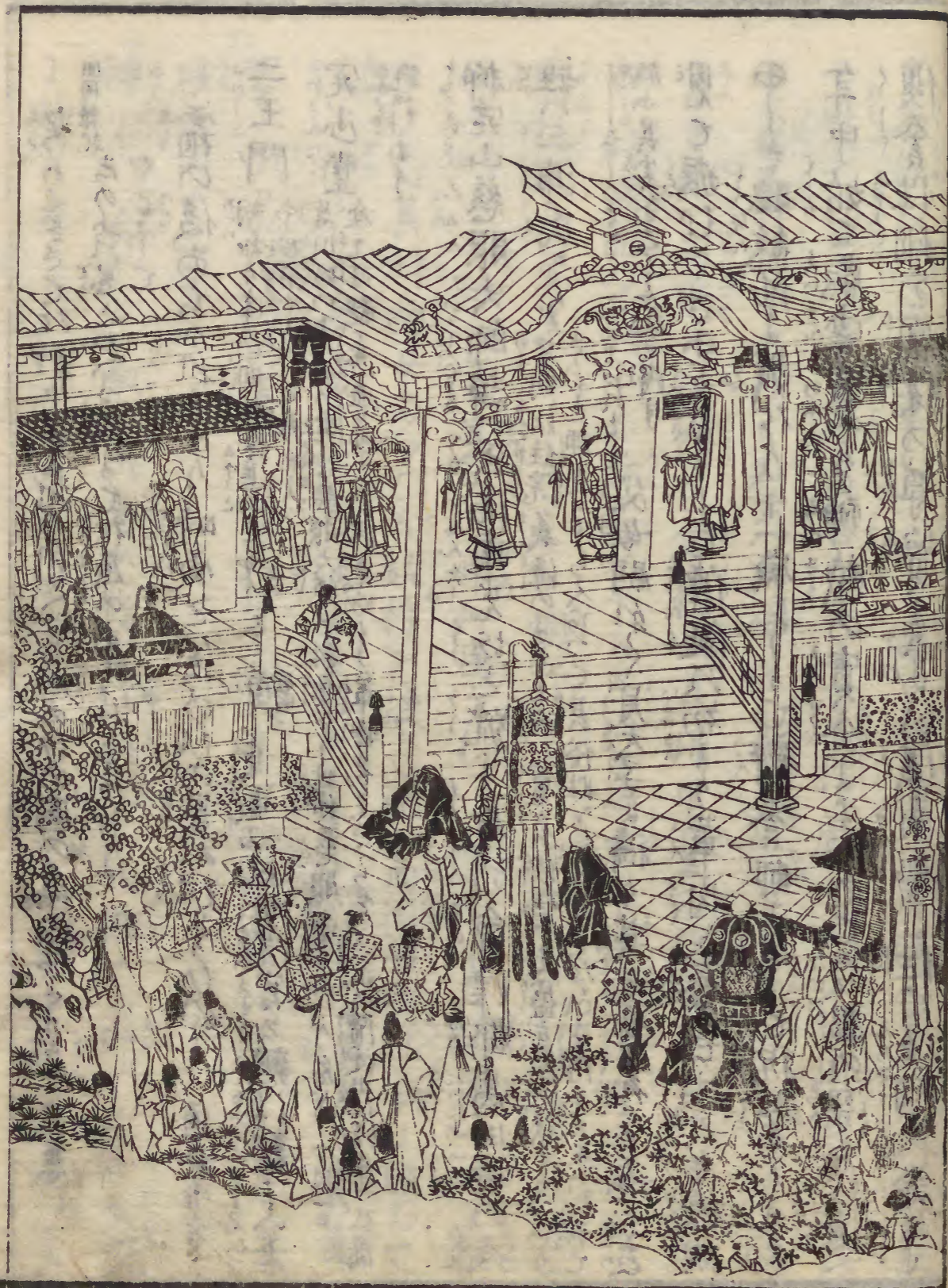
常念佛堂 白雲生明神會念仏無窮なる祈禱祈禱なるを思ふと海雲家西條の地

宗廟 御當家 御代々の 御靈屋あり常山の院中より

坊舎凡三十五宇 拾遺名不詳今も洋あり

愚の園 古き名不詳一て常山の懸名をり八雲は抄とてい奇枕名寄等も武藏の園

按常山の惣名と上坪と号す或人云じり一藤堂度の事宛あり一以奉國伊賀  
の上坪は地勢相以てとて名とすとある是大なる誤なり永保二年小田守小桑  
家分限帳に島津孫に席とてい田保寺古馬助等に戸知行の中より上坪の地を  
皆記しし所のさうい愚の岡は優遊しとてい法坐の社五象の  
天神とすしとてい一母りて松なる茅系と焼とる



十月二日 山堂  
法華八講

契りてきてたれ、其れいづくよまのひの國の處のまごりえ 堯惠  
圓周雜記 志のふれ忌とてつる取よて松原のありけふりけし

霜の後あらわれより時雨をい志のひの思れれもうひれ 通真准后

二王門 明和九年の圓周は鳥土とありて 東嶽山 大明院宮と辨法親王の筆

完山堂 屏風にありて完山慈眼大師の堂あり世俗慈眼堂といへり毎年十月二日  
座主法親王通師とて洋奉坊より筆興をふりてを山僧徒出仕は筆八溝  
執りあり

柳完山慈眼大師諱へ天海南光坊と號す奥列會津郡高田郷の人  
姓は三浦氏あり 是れ法住院義澄の子とも或は蘆名仲理去史盛高の一族ともいへり  
父其美とてとて降す 父母嗣れく月天子は禱り其母奇花と香とを  
因て振むとて九月とて降誕は初より葷肉と食せずん寺清朗

中して聰敏化は然たり十一歳にして辨法師と投して祝髪一天文  
年中始て嶽山に登り神藏の實全よとて合教の深き傳へ  
偃舎性相と園味の尊實よ學ひ復南都に往て法相三論等

の教法以學ひ成重といへり逢て神道の奥儀を究足利の學校  
小遊ひて孔老の書と讀道器といへり小僧擗巖と學み後郷に帰り會津  
の大寧禪師よあひて教外別傳の旨と發明し善慈和尚小碧巖  
集と總一百則の話頭と會得は其頃甲斐の信玄台教と教ひ

ある時諸師と請いて論義せしり天海と講主とす衆皆辞理の奇なりと  
感移れといふ是よりと名を朝野よあらふ後常列江戸崎不動院よ  
住す時小文祿二年夏大よ早民られて師として請雨の法を傳  
せし其時神女あつて五銚杵と授く師高田浦の深淵に臨むて  
法を傳しめよ膏雨忽注て百穀大よ登る 又慶長  
四年武刃仙波の喜多院よ住す同八年下野園長沼の宗光寺に

移る同十二年  
神君 命して嶽岳の南光坊よ住持せしり再命して喜多院  
に歸り居らむ同十四年山門よ登り法華大會を行はく時よ

座遷師大両



月毎の御日ハ大座  
 行影と次院遷座  
 奉らんとして江府を道  
 者群衆一と道各  
 溢る実此地熱鬧  
 の中最も  
 首ある



上野  
 清水堂  
 五七  
 滝ヶけ  
 て  
 志るも  
 さりま  
 の  
 梯  
 りれ  
 室井  
 其角



清水堂  
 死見圖

重職の勅許と蒙り新題者の精義嚴重はたとわめり  
上皇 後陽成院 度々召ありて法要を詔問したるひ奏對詳明かふる  
依て處感儀くつ権僧正は擢られ御まのくつ侍衣燕尾等を賜ひ  
山科の毘沙門堂の門室に附せらるる又震翰を下したるひ権と轉して正  
小任す同十七年

神君河越は狩したるひ折ら仙波に立寄りたすひて殿堂を修營せり  
わ莊園と寄こせたまふ同十八年復命を兼りて日光山に居る

神君 薨去れ後其遺命を奉りて葬を之終山に營り元和三年尊  
靈以日光山に遷坐せり奉る是往古の大職冠の例は倣ふ則山王  
習合の神に鎮たてまつり勅と奉りて

東照大権現と號し奉る 大樹 台徳公 亦神君ととせしむる  
優寵したるひ其先元和二年大僧正に任せられ 先帝 正親町院  
二十五の御遠忌にも侍導師に請りたまふ后後寛永二年

大樹 命と東叡山と稱しわ師と一庵山とす又上皇の  
二宮と 守證親王 日光山の清門主と請せり師の清子に彼法に  
たすふ其後上野國新田庄世良田山長樂寺と賜ひ

東照大権現の神祠以下の諸堂と造立あり亦同く二十年の秋  
僧正微疾と示す時 大樹 大猷公 とよひ紀乃曲相 頼宣公 駕と  
屈し疾と向たり僧正遂に遺語五則と書け 大樹畫三探函命に  
たすひて其頂相と写さしむ一日唯識論と関ひ忽ち文殊菩薩の來

現と見ると則其時至ると走り端座合掌して遷化す時寛永二十年  
十月二日あり 東國高僧傳に寛永十九年十月二日化寂とあり 紫雲天花の端

あり影堂と當山をひひ日光天台の三山に建てる當山慈眼堂其一あり  
慶安元年慈眼大師と謚號の詔勅と下りたすふ 以上兩大師縁起とよみ東

慈惠大師 諱ハ良源江の淺井郡の人父ハ本津氏母ハ物部氏あり  
延喜十二年壬申九月三日よ生る 父母子孫を傳へ觀音に有りて説く 十二歳

延喜十二年壬申九月三日よ生る 父母子孫を傳へ觀音に有りて説く 十二歳



正月三日  
大黒詣



毎歳正月三日都下の  
諸人東叡山護國院の  
大黒天(すくも)此作影ハ  
茶(信實)茶(信實)茶(信實)  
世々盛衰著一此日供物  
の(信實)之(信實)小(信實)ひたして  
茶(信實)儀(信實)の(信實)筆(信實)ふ(信實)ま(信實)俗  
是(信實)と(信實)ぬ(信實)て(信實)所(信實)福(信實)の(信實)  
湯(信實)と(信實)



もして叡山の理仙と師と同一六年は薙染す理仙入寂の後三條  
右大臣定方公恩訓律師として大師は受戒せしむ亦尊意僧正  
と拜し登壇し早く博學の名を得たり應和三年八月清涼殿に  
南北雄才の僧召召て御八講行はせたり時身成佛の相と顯す  
康保三年天台の座主は補せられ山勢を領する事とて二十年又  
天祿二年四月十五日梵網戒品を誦し終數句を唱ふるに至つてはより  
光明を放りといひ天元四年七月大僧正は轉し輦車に宣旨を下し  
後永觀三年正月三日弥陀の尊號を唱へて入寂したるは化壽七十  
四一條院永延元年其徳の高を仰ぎて謚と賜ふ  
慈惠大師 影像 民部法眼筆

の難を免れたるはひまより聖の備へて船と湖東へより藤田井の爲に少時法をたてし  
後山門再興ありて天正年中彼阿闍梨の公のうらた尊影は横川に遷坐するに  
ついで今如き講堂に安置したるは是れなり民部法眼のうらた尊影は横川に遷坐するに  
ハ列安濃津の西來とすといふは是れなり其後唐の山門よりいひはるるも東の  
うらた尊影は横川に遷坐するに  
慈惠大師遺言してはたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
一箇月を執事してはたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
歩を運ひ祈願してはたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
あせり  
同除魔 或時疫鬼來りて慈惠大師と惱さんとす時に四融三諦を觀して  
一わんたるは夜叉の形相とありはたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
とを金にちりてはたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
萬民草屋の扉に至ると今に其統像と賜はたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
東鑑曰 寛元五年丁未三月二日乙卯今日可摺寫  
不動並慈惠大師像之由被仰政所之間有其沙汰  
同二 十八日辛巳爲將軍御祈不動尊並慈惠大師  
像一 萬體被摺寫之今日有供養之儀導師松殿法  
眼也 信濃民部大夫道行然奉行之  
權大僧言鳥井兼雅等遊世の仙とて世に其影をいし  
統像摺寫常ふそえすとて今に其統像と賜はたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
慈惠大師の尊像と毎月一度摺はたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに  
て一わ其外りてはたより奉山の例にすうとてこの尊影は横川に遷坐するに

といめると多幸ありたり也今老病とろほそくまふ今  
 心も擽たてまつるとそ母もひつげけりか

手加身世ふちらん後のますてもいゆるんはとゆれとも思ふ 栄雅

慈眼大師真影 狩野探幽筆

慈眼大師の真影は慈惠大師の影像と共に當山院々傾きまで一箇月は執事

大慈悲 慈眼大師の告よりて信加山隱山は在りて當山より一たよりとり

佛祖 統紀曰 大士 籤天 三百 籤越 圓通 百三十 籤

柳當山は江戸第一の橋花の名勝よりて一山花はあふんと云ふ

台命よりて和列吉野山の地勢と摸し植させらるる故に花は速

あり遅ありて山上山下盛とらとり弥生の花蓋は都鄙の老若貴

とれく賤とれく日毎必社と連てこは群遊し花のそちみ尺寸の地を

争ふて帷幕以張延席と設く詩歌管絃ハ鶯聲必和し錦衣繡裳

花影は映し愛改賞咏日の暮と去らん

慈雲山瑞林寺 上野清水門の外武三丁北の方あり日蓮宗よりて

螢澤

谷中宗林寺の境内  
 あり又西林寺の  
 池とも強風と帯か  
 すて此辺雲の光り  
 作は勝れそり

草地茶と

落る

飛

哉

芭蕉

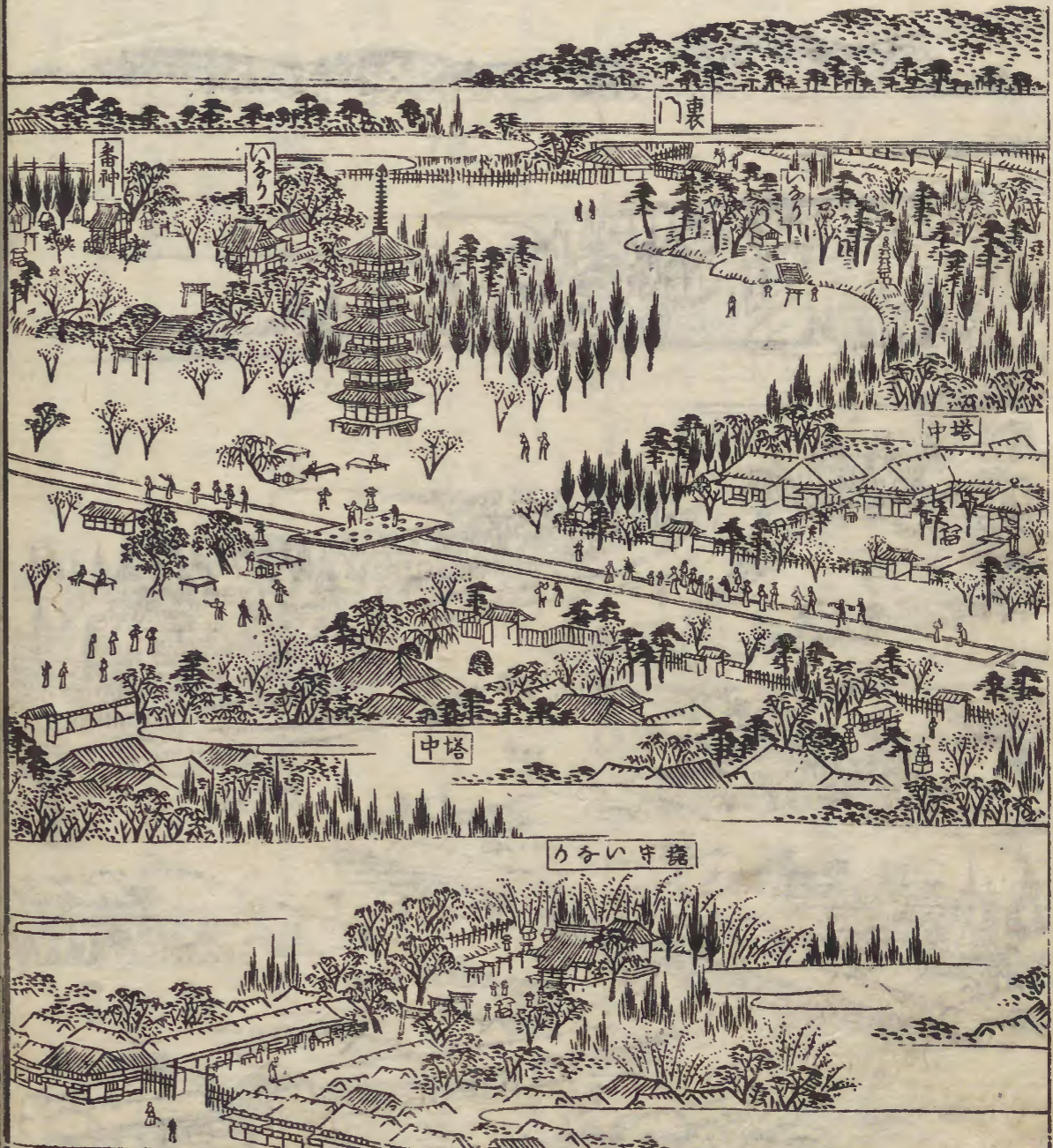
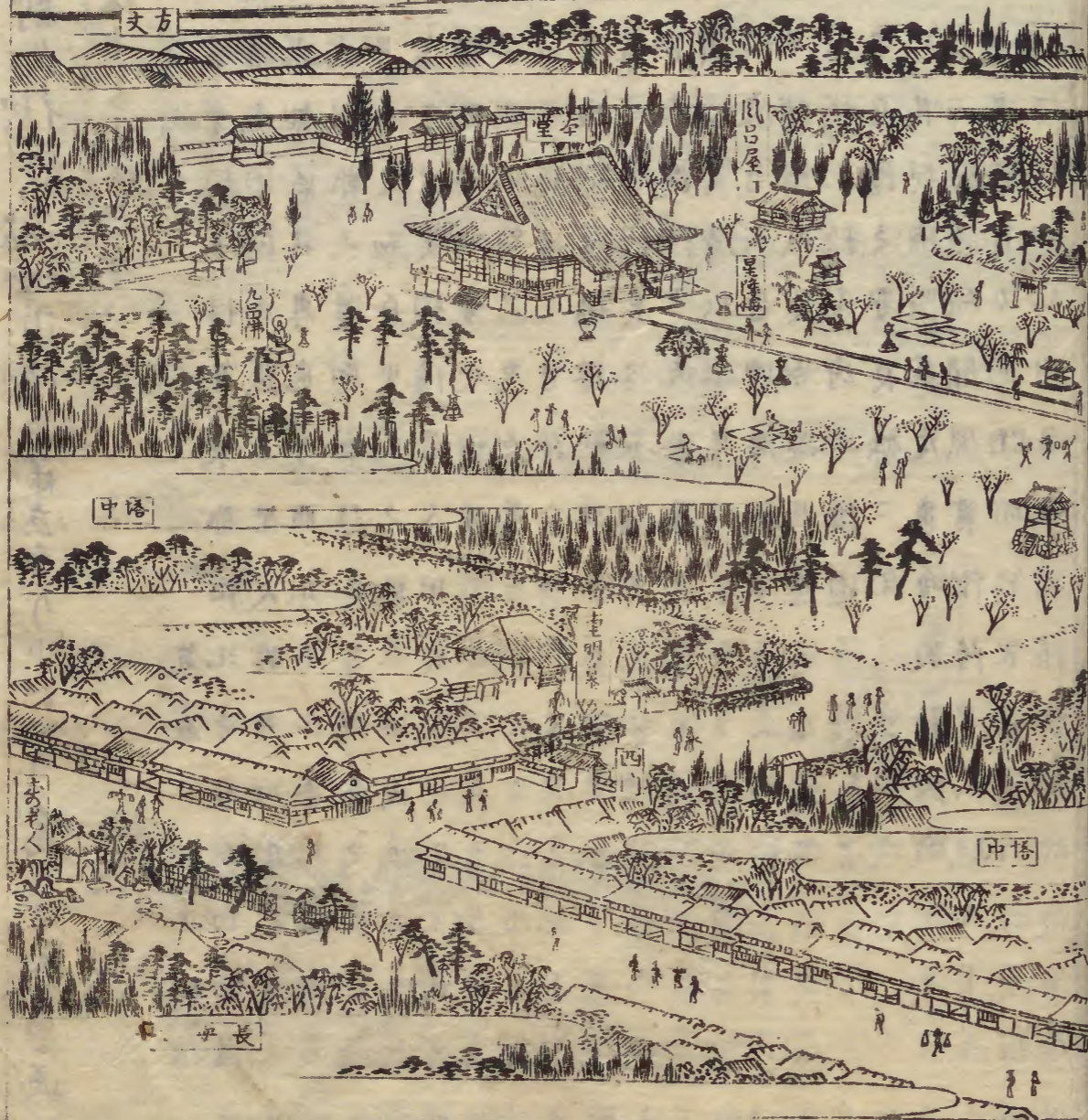


甲品身延山の觸頭江戸三箇寺の一なり 元山ハ奉山十七世慈雲院日新上人  
 天正十九年れ草創なり 奉尊大六の釋迦如来ハ延宝五年れ田沼平  
 ろひて今侍着と有りを存せり 當寺ハ安徳公日蓮大士の像ハ一圓不  
 長耀山感應寺 上野谷中門の外ニあり 天台宗ニして奉尊ハ傳教大師  
 の作の毘沙門天と安置ハ當寺始ハ日蓮宗ニして宗祖上人と元山と一曰長  
 上人中興ありて中々浦一宗の寺院たり 元禄年中故ありて台宗に  
 改られ爾より後東叡山ニ属ハ其時大明院宮の清願よりて叡山  
 横川小あり 傳教大師の作の毘沙門天の像とて移 奉尊と  
 せらる 京師鞍馬山の毘沙門堂ハ比叡の乾久當りて佛法守護の道場  
 れハ當寺も東叡山の乾久當とて鞍馬寺よりせらる 境内  
 檜桃の二苑ありて春時燠燠をり 昭和九年の火災ニ焦土とるなり 仍て  
 五層塔 當寺中興日長上人建立あり 一々明和九年の火災ニ焦土とるなり 仍て  
 寛政の今再建して 長久山奉行寺 同取小の通ニあり 日蓮宗ニして元山ハ日玄上人 大永

谷中  
 感應寺



其一





其一

同善里  
惣圖

灌叔勝而之二天崩孫名得其攝丘盡百丘則思奚里道  
 增氏乘鎮材世下谷父持斯祀之與爲有唯太太名曰灌  
 脩之西之專屬戰少道資丘也所山木餘址田田灌暮碑文  
 德有毛正委管爭恢真官蓋寺在皆黍年早氏保無太寺曰  
 信者二其兵領諸廓名左不與而用閱于有鄣忘其氏本行  
 以皆總封機上國有資衛畿群道其壘今之鄣之遺也疏在  
 懷其諸壇之秋瓜大清門得屏灌號壞矣叔自里而寺半東  
 初力城險要氏裂志以大矣攝之名臺圯傳人丘乃西里都  
 内也聞其長府各博永夫可遷曾矣圯傳人丘乃西里都  
 至既風走祿中據涉亨道不於孫寺彷彿昔人丘乃西里都  
 敵而震集二推其經四灌謂斯今舊徨太之乃西里都  
 國列帽每年道黨史年其奇里懸在不田思其北人郭  
 諸界降與戊灌迭善士號也者河谷忍氏太有思北筑  
 將寧者鄰寅贍爲兵子源誓緜庚中去既田候山太寺波  
 皆肅不國城智脣齒明道祿譜永世太丘里也之曰氏丘石  
 謂百絕戰氏豪齒明道祿譜永世太丘里也之曰氏丘石  
 彼姓大列瀟道畫灌頰牒中相田其自址道也曰正捨  
 專悅半在江有真策於政太也義氏址過有也灌里道捨  
 爲服爲以尸文道是相十田遷以羣焉其丘故蓋人灌撰  
 德道上寡焉武灌時列世氏則守屐故墟二無山奚丘

六年草創  
 創之往古  
 田道灌  
 の建ち  
 るりとい  
 へり當  
 寺庭中  
 道灌



其二



石塔



其一

浄光寺

御腰掛





我專為暴是國不戰而自服也  
采道灌所詠迄十今世御天正  
章也以袞揚之三年庚午寺主  
知長也宮成煥圖樹石十丘人  
昔何至公之德及武人無忌其  
世也吾聞之里羊叔子亦無子  
想之所建廟立碑歲時享祀望  
灌公異於此萬石國初時顯五  
之封食邑五萬石為顯公孫資  
以歲時朝東奕則春秋禱肅有  
之必若朝觀當其時禱肅有  
白羽踊躍用赤羽如日壁頌司  
發爾於是乎君大夫皆延頌司  
焉爾竟完其守備訓有司以義  
令名以示其子孫無亦監於斯  
焉寺主碑其丘焉皆有也夫然  
三十番神堂 敬堂のまにあり昔道灌中興川に安置せし靈像よりて元眼日蓮上人  
日暮里 新落み代りては永保二年北条合限帳に遠山弥九郎江戸知行の中に屋中新地の  
感應寺裏門のありより道灌山と界とん此迎寺院の庭中奇石を嘗て

假山を設け口時草本の花は常々遊觀み佛小枕中二月の羊よりの酒  
亭茶店の攪儿不せく貴賤社とほとて春の日の永を覺ゆる此里の  
名めしあるものあらん

七面大明神社 因不延命院と云る日蓮宗の寺に安置す穴山日長上人萬治

三年庚子正月十六日夢中必靈告を得て後勸請すと云る

或人云慶安元年三澤の局甲斐の七面山に子日の洞森に新し一葉中に鱗一枚を感得を  
依り當社を建てる 嚴命に因りて延命院と号ると云る

補陀山養福寺 觀王院と號す因不北の方あり奉尊ハ三尊の弥陀佛穴山ハ

本食義高上人あり 傳の前の山満寺の條下也

觀音堂 西國坂東秩父百番のちんせん 奉尊如意輪觀音 佛工春日の作りて西國札不茅一番

十一面觀音 相の加藤兼光の作りて坂東札不茅一番 正觀音 慈覺大師の作りて秩父札不茅一番

抑此百觀音ハ義高上人の建立れり上人初高野山の高臺院に住職

たりし後彼寺を退去し當依り越さ百番の札取を摸さし事と

企川是奉土母至りおされ兒女等の結縁の爲とあり依り此依り

小庵のありりろみ開きて寺と

往古田道灌勸請あり

数千歩の地を

寄附せられしと奉尊おんふ

野山より迂り奉る

霊像ありとも

百眸と見えしと致きされを被補

一眸毎に佛舍利一顆を御首み

籠竟百眸の尊像をうら

隆貞御の真蹟あり

二三門の額と補陀山とのり

波小路

諏訪明神社

同取北の方諏訪の臺より信及後方の祭神は

上段

同取北の方

諏訪の臺より信及後方の祭神は

上段

す其後右田道灌此地を江戸城の出張の若とせり

彼當りて郭内の

鎮守とみせしとを社頭今も

あり當社別當の真言宗よりして法輪山浄光寺と号し

當寺の書院の

高崖に架して眼下み千歩の田園と見やせり

四時の眺をならすと云奉る

中にも雪のありり勝せられし世み

して雪見寺とも号し

人麻呂祠

約あり三百餘の石あり

比藏堂

浄居山青雲禪寺

同野小あり妙心寺流の禪宗よりして

田家代々布金

の道場なる昔堀田相別刺史紀正亮候羽別山形在城の頃

白映和尚の道

光と慕ひ師小就て法と需む候

移すの頃彼比小庵と結ひ師を

して煖座せむ其後當國入間郡

より藤井山浄居寺と名す

す

白映和尚の道

其後融君正順候香花料として北總の佐倉より

境内富士浅間宮秋葉金比羅辨財天護國稻荷等

何れも往古を田

道灌の勸請ありと

船繋系松

青雲寺の境内涯小臨

鬱蒼として

二株あり

一が一株は往安永元年の秋大風小吹折て

今一本のみ



ほろりよふ

す

さ

あ

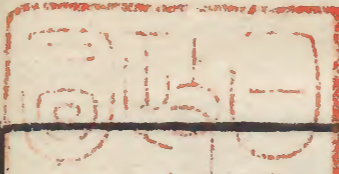
れ

其角



道灌山徳虫

文月の末をさる中  
 小一とよりあ虫塚  
 の地を奇絶とす  
 洞く吟客にイ  
 未だて終夜その  
 情音を添置す  
 中も憧鬼の言  
 ハ勝てぬ  
 海霧の娘の  
 あつとぬ  
 金毘羅の振拾  
 うく  
 浴明の  
 杉  
 一段と  
 いん



孩もろ此樹蔭より 眺望れ荒川の流まら白布を引くごとく筑  
 波黒髪いらくらの山やま々々ハ晝小似たり 豊島とよしまの村落ハ眼まなこ小ありて耕かき一畑いちばた  
 う川賤しん業わざまも七しち至小入利根川とねがわの遠帆緑樹えんぼりくじゆのうけに見えられ  
 内れ々々白鷺しらさぎの飛りごとく此比このちの風色画かぜいろゑ中なかにあるか如ごとく  
或人云く往昔此麓ハ豊島川小狭一入江と道灌の岩陣あり一頃ハ米穀共外をへて運送  
 の船よりこの松と月堂小せりのまてはまくといふもあまのち繁とむの義とあはれは人の  
 の河うくはまくといふ目的小す林のう小同いふとて後道灌山の船つちま松と林  
 てまのうに此の松と月堂小せりを傳へて道灌松繁の松と唱ふとを  
 道灌山 一名と珠山ともいふ南ハ新堀と隈を小ハ平塚小接す往  
 古右田道灌江戸城小あり一頃出張の岩陣とせ一跡ありとも  
 又岡道観坊といへる者の身宅の地ありとも云傳ふ  
道観坊とて長雄といふ後藤繁一  
 感徳寺と長雄山と稱ふも此の地あり 此比藥草多く採藥の  
 輩常小こ小来れそ珠小秋の頂ハ松虫鈴虫雪路小ありのて清音  
 とありハす依て雅客出くとも小来り風心詠一つさ月小歌うたハ七其言  
 と愛あいせり

